

乳幼児期の育ちと保育を考える

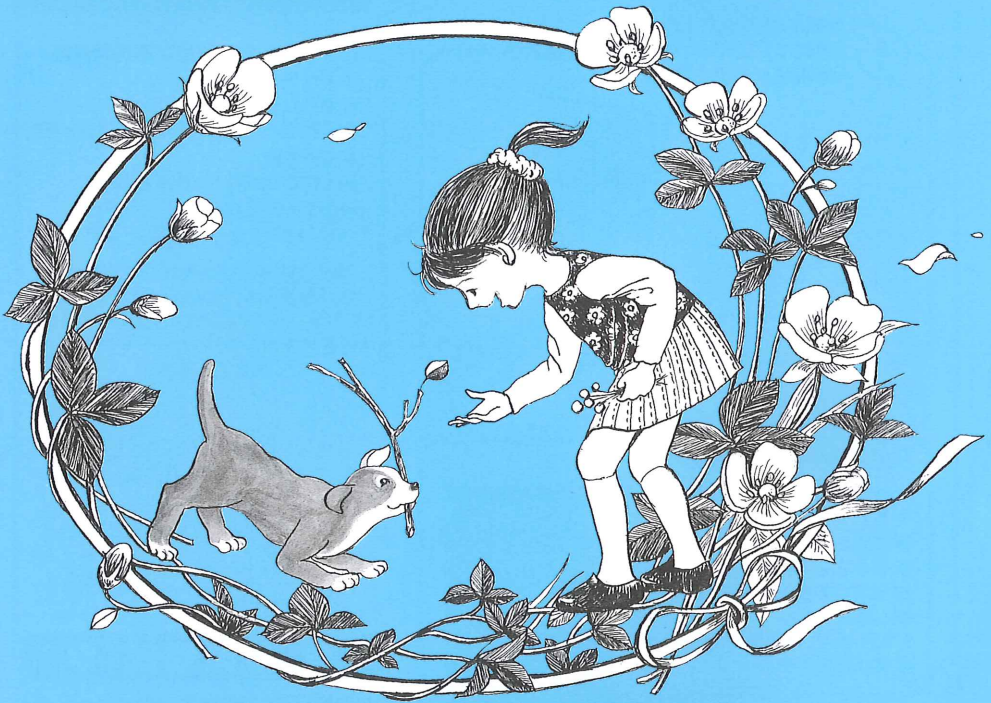
幼児の教育

特集

倉橋から

子どもたちへの伝言

8
2010



フレーベル館から新しい月刊保育誌が誕生!

園の未来をデザインする

保育ナビ

理事長、園長、副園長、主任など、保育現場をマネジメントするすべての保育者のための月刊保育誌が誕生しました。

文部科学省や厚生労働省の動向など、保育を取りまく政策レベルの話題を含め、これから園の未来を担う保育者にとって必要性の高まる情報を、わかりやすく紹介します。

26×19 cm 80ページ 定価950円(税込)



1 他園の様子がよくわかる 「特集1」500人アンケート&座談会 「特集2」実践報告

4月号のテーマは「選ばれる園になるために」。少子化の中、今後の園のあり方を考えます。

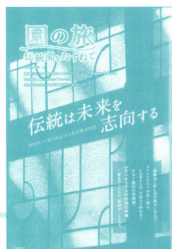
5月号／「子育て支援」、6月号／「感染症」です。その他、「研修のあり方」「評価と公表」「保護者対応」などのテーマを取りあげます。



3 グラビアページ 園の旅 ～伝統園をたずねて

全国60か所以上の保育風景を撮影してきたカメラマン・渡辺悟が、各地の歴史ある園をたずねます。園舎や子どもたちが生活する姿から、園の歩みが感じ取れます。

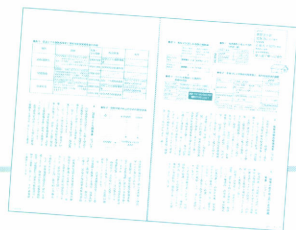
4月号は、お茶の水女子大学附属幼稚園です。



2 園経営に直結する情報満載

《保育コンサル》
「園経営の扉をひらく! 保育マネジメント講座」
《保育最前線》
「国の動きを読む! 研究者の目」
《保育アラカルト》
「ソーシャルワーカーの園支援ノートから」など

園のマネジメントを考える上で欠かせない「予算」や「人」の管理、行政の動きなどを、《保育コンサル》《保育最前線》《保育アラカルト》のコーナーに分け、わかりやすくお伝えします。



年間購読

『保育ナビ』を1年間お買い求めいただく場合は、年間購読をおすすめ致します。詳しくは、下記までお問い合わせください。

幼児の教育

第109巻 第8号

目次

● 巻頭言 ●

世紀転換期における日本とロシアの保育界 村知稔三 4

● 特集 ●

倉橋から子どもたちへの伝言

思い出を越えて コピソン珠子 8

届けられたメッセージ 松井とし 12

● 園のくらしを育む 5 ●

園の風景（1）—くらしの中の音風景— 秋田喜代美 16

● 保育の場で子どもの発達を支える（2） ●

共に歩む 大村禮子 20

● 保育の創意工夫 8 ●

自然の中の一泊キャンプ 前原 寛 26

乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の教育

第109巻 第8号

● 緑蔭図書紹介 ●

保育の原点を案内する一冊 宮下美智代 30

関係的存在といわれる人間へのまなざし 西脇二葉 34

● 幼稚園の源流を求める旅 森有礼の第二次在米時代(6) ●

北海道開拓使派遣女子留学生の教育 国吉 栄 40

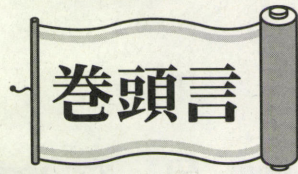
仕事の現場から「心理相談員って知っていますか？」 佐野恵子 48

● 保育の現場から ●

未就園児クラスの保育で思うこと 河野道子 52

● お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(44) ●

日常性から保育カリキュラムを考える(2)
いずみナーサリーにおける保育カリキュラム 私市和子 58



世紀轉換期における 日本とロシアの保育界

村知稔三

六十五回目の八月十五日が近づいています。二〇世紀を特徴づけた総力戦である第二次世界大戦やその直後の社会の実際を知る人々も少なくなりました。他方、この日を終戦記念日とすることで、敗戦の痛みや重みを感じながら、反省しようとしてきた私たちは、この間に、十五日が隣国では戦勝や解放の記念日として祝われていたり、同日を過ぎても戦闘行動が継続していたりしたことを知るようになりました。たとえば、私が研究の対象としている旧ソ連と日本の間では八月八日から九月五日まで戦闘が続いていました。

当事者が少なくなることで記憶の継承が難しくなると共に、その時代の歴史を客観的にとらえ、共有できるようになってきているともいえます。その意味でいまこそ、「故(ふる)きを温(たず)ねて新しきを知る」ことが大切です。



もう少し近い時期の保育界についても同じ格言が当てはまりそうです。ここでは、世紀転換期に子育てや保育をめぐる状況が大きく変化した日本とロシアについて、その経過を簡単に振り返ってみたいと思います。

ご存じのように日本では、二〇年前の一・五七ショックを契機に少子化という造語が広まり始めました。それと共に保育に対する社会的な関心が高まり、マスコミで保育のあり方が大きく報道されるのも今日では普通になっています。また幼稚園と保育所の関係も変わり、園児数では一九九八（平成10）年に初めて後者が前者を上回りました。同じ年に出た『厚生白書』が「三歳児神話に合理的な根拠は認められない」としたのは偶然でしょうか。

このような関心の高まりは、法令の改正などを通して、保育施設に多くの役割・機能を追加することでもありました。実際、保育時間はかなり延び、さまざまな保育需要に応える特別保育もいまでは「特別」ではなくなってきました。

他方、そこで育つ乳幼児や、働く保育者をめぐる条件はあまり改善されていません。そのうえ、近く予定されている施設基準の緩和や保育制度の改変により、保育条件がかなり後退するのではないかと心配されています。

こうした緩和や改変の土台にある考えが、一月号の巻頭言でも指摘されていた新自由主義です。これが現代世界を特徴づけ、格差や貧困、さらには飢餓や戦争と結びついている点は、堀尾輝久氏が述べられているとおりです。



この新自由主義の拡大と一九九一年のソ連の解体とが結びついています。

一九八〇年代中ごろに旧ソ連の指導者となったゴルバチョフ氏が始めたペレストロイカ(再建)とグラスノスチ(情報公開)は、結果的にソ連社会の暗部を明らかにし、その再建ではなく解体をもたらしました。

それは、二〇世紀後半を特徴づけた米ソの対立(冷戦)の終わりを意味しただけでなく、ソ連やその国是となっていた社会主義との緊張関係を、米国や資本主義が失うことにもつながりました。二〇〇一年の九・一一以降のアフガニスタン・イラクでの戦争や二〇〇八年のリーマン・ショックはその象徴です。

解体で十五の国々に分かれた旧ソ連の多くを引き継いだ現在のロシアは、そのつれを支払うため、一九九〇年代を通して混乱しました。一九九二年には物価が数十倍にもなり、路上には物乞いがあふれました。その中には子どもの姿もありました。ソ連時代の貧しいながらも均等な社会から、中間層が少なく、一部の金持ちと大半の貧困層という社会に変わったからです。一九九八年には金融危機にも遭遇しました。

こうした状況を反映して、ロシアの合計出生率は一九九〇年の一・八九から、現在では日本を下回る一・二五まで低下しています。また、日本では千分の三という乳児死亡率がロシアでは十を超えており、主要国では高い段階にあります。ただ二十一世紀に入るところから原油や天然ガスが高騰し、経済が成長軌道にのったことから、死亡率は低下し始めています。



ソ連時代にはほぼ全員が働いていた女性は、一九九〇年代に進められた市場経済化の影響で三人に一人が職を失いました。それに伴い、保育施設は九万弱から五万余りまで減少し、園児数も九百万人が半分以下になり、いまあまり回復していません。

この時期に私がモスクワやペテルブルク(旧レニングラード)、さらに地方都市ヴァトカで訪ねた保育施設は、予算削減の影響で、施設・設備共に老朽化していました。ただ、ソ連時代には広い国土で一定の保育水準を維持し、「ソビエト人」を育成するため一元化されていた保育内容が、一九九〇年代に自由化されたことで、保育者の意欲には熱いものがありました。どの国でも保育の自由は大切なようです。

近年になりロシアの経済状況が好転すると、施設も改修され始め、新しい設備が目立つようになっていきます。何より、保育施設の見学に訪れた私たちに、以前はお茶くらいしか出なかったのが、最近では立派な食事が用意され、シャンパンまでふるまわれようになりました(ちなみにロシアの正餐は昼食です)。

このようにロシアでも、知識主導社会や高度知識化社会に対応しようと、保育や教育への投資を増大しています。ひるがえって日本の現状はどうでしょうか。

隣国であるにもかかわらず、日本とロシアの保育界の間に組織的な交流は依然として無いので、ロシア保育界の観察を、その歴史研究と共に(拙著『ロシア革命と保育の公共性―どの子にも無料の公的保育を―』九州大学出版会 二〇〇七年参照)、いましばらく続ける必要がありそうです。(青山学院女子短期大学子ども学科教授)



倉橋から子どもたちへの伝言

思い出を越えて——バンクーバーにて——

コピソン珠子

一冊のアルバム

いま、私の机に飾ってある一枚の絵はがきを眺めながらこの文章をしたためている。本多玉枝（昭和十七年卒のクラスメート、当時の名前は、小野田トミ子）の『なつかしい玄関』と題するもので、まさにそれはお茶の水の附属幼稚園に通った私たちにとっては、いつまでも忘れることのできない『玄関』だ。これこそ当時の思い出のシンボルでもある。

私は昭和十（一九三五）年生まれ、昭和十五年、東京女子高等師範学校附属幼稚園（現お茶の水女子大学附属幼稚園）、林の組に入園、十七年修了。その後、続いて

三年生まで同附属国民学校に通った。しかし、一学期も終わると、悪化する戦争のため私たちのクラスもナリザリバラバラになり、私は個人疎開を余儀なくされた。何度か移り変わる疎開地への荷物の中に、私の母は一つ大切な宝物をいつも入れておいてくれた。きっと将来、何かの役に立つことを信じていたのであろう。それは赤い表紙の私たちの幼稚園卒業アルバムだった。いまだこそカバーはいささかはげてしまったが、この『宝物』は現在、バンクーバーの私の書齋で健在、何かにつけては昔といまの大切な絆となっている。

このアルバムの写真を一枚ずつ眺めていると、戦争が始まったも私たち幼稚園児の日々は真に楽しいものだった

たことを思い出させてくれる。当時のことを私たちの担任の清水光子先生はいつぞや、次のように話してください。たことがある。「先生たちは、どのようにしたらみんなが毎日楽しく遊べるか」そのみを常に考えていてくださったこと。私たちは真に子どもらしく遊びを通じて成長していったのだ。成長していく過程で、遊びがいかに大切な要素であるかは、今日、世界各地で強調されながらも、おろそかにされがちである。

私たちの先生方は戦時中、物がだんだん消え失せていく時、子どもたちへの深い愛情と献身で私たちと日々を過ごしてくださいましたのだ。その戦争中のご苦労はいかばかりだったか。いま、私は深い尊敬と感謝に堪えない。

日本の戦地となった

東南アジア、中国本土、香港で思う

私の夫がカナダの外交官だったころ、私たち一家は東南アジア、中国本土、香港に赴任した。いずれも私にとつて大東亜戦争とつながる思い出のある土地だ。私は母と

一九六五（昭和40）年シンガポールを訪ねたが、そのシンガポールが陥落した一九四二（昭和17）年二月、幼稚園の屋上にて全校で祝賀記念撮影をした。その日にゴムボールとキャンディーをいただいたことはいまでも忘れられない。これは陥落シンボルのようなものだったのでろう。一九七〇年代前半、北京を中心に私たちは中国に住んでいた。カナダは日本より一步早く中華人民共和国と国交樹立したので、幸いにも一九七二（昭和47）年九月、日本国と中国の歴史的国交樹立に立ち合うことができた。北京の秋晴れはその色も深く幅も広い。その異国の天下で数十年ぶりに初めて演奏された『君が代』、揚がる日の丸を目前にした私は複雑な思いで目頭が熱くなった。多くの中国人を殺害、また苦しめたあの大東亜戦争。あの歴史的宣戦の日に、私はこの幼稚園にいたのだ！

パシフィスト倉橋先生の思い出

——「大きくなってから思い出してもらうために」——

もちろん、わが幼稚園の銀杏の大樹、美しい藤棚、毎

日遠路を送り迎えしてくれた母、そして、とてつもないほど楽しく遊んだ毎日のことは、いまでも昨日のこのようにはつきり記憶にある。しかし、今日その時代を思い浮かべるといつも私の心の中には幼稚園と戦争の思い出が重なり合っているのだ。二〇〇六（平成18）年十一月、当幼稚園の創立一三〇周年記念式典に参加するため、私は心新たに私たちの卒業アルバムをゆっくりと一ページずつめくっていた。主事の倉橋惣三先生は、いつも私たちと一緒に遊びたくなるようなお人柄だった。一九四〇（昭和15）年四月二十二日、初めての保護者（当時は全員女性）参加の久米川遠足にも同伴なさり、その時の記録写真には先生はあぐらをかき、真ん中に座り込み、お膝の上には一人の幼稚園児が座りこんでいる。

私たちの幼稚園修了を祝ってこのアルバムに残された倉橋先生の生徒へ送る言葉は、いつ読んでも私の心を強く揺さぶるものがある。これは「大きくなってから思い出してもらうために」と題した短文で、私にとっては時がたつに比例してその意味もより深くなっていく。

「昭和十六年十二月八日。あのアメリカとイギリスとに對する宣戦の御詔書がありました日、あなたは此の幼稚園にいました。この日は、日本は素より、世界にとって、永久におぼえられる日です。あなたは、ほんとうに大きな日に幼稚園にいました。先生方は、この日の意義を、あなた方にどうして正しく伝えようかと苦しみました。

（中略）

やがて戦争中のお正月が来ました。あなたはふだんよりも貴い一歳を加えました。その八日は第一の詔書奉戴日で、幼稚園全体で、「ニッポンハツヨイ。コノイクサニ キットカツ。ワタクシタチモ キット ヨイコニ ナリマス」と、声を揃えて言いました。（中略）

この大戦争は長期戦であり、宣戦の御趣旨を完遂するのは大事業です。それには、あなたがおとなになる日、しっかりお国の為に尽して下さることを、きつと待っていますと、先生方は、あなた方の顔を見つめては、心から念じていられます。

昭和十七年三月 附属幼稚園主事室にて 倉橋惣三

(旧漢字・旧仮名遣いを、新漢字・新仮名遣いに直した)

まず右記にあるごとく、先生がこの戦争の意味をどのように子どもたちに伝えるべきか、大変苦勞なされたことがうかがえる。子どもたちには偽りは言うまいと。正しい戦争が有るはずはないから。またあの宣戦の日は世界が永久に忘れてはならない程の意味が有ること。まず私からみると先生は完全なパシフィスト、平和主義者であつたに違いない。そしてその思いをこのような形で當時、書き残しておいてくださった先生の偉大なる勇氣に、私は深く感動する。官立の教育機関である幼稚園などは特に文部省、そのほかの政府の厳しい監視のもとにあつたに違いない。後になつて私たちの担任、清水先生は監視する役人が倉橋先生の所有物、行動などを調べに頻繁に幼稚園にやつてきていたことを口にしていらつしやつた。「ニッポンハツヨイ。……」の決まり文句はそうせねばならなかつた当時の実態を書き残しておいてくださったのだと私は読み取るのだ。

これが大戦争であること(なぜこのような戦争をせね

ばならないのか)。そして、とても日本のために完遂できそうな戦争ではないこと。卒業していく幼児の顔を見ながら先生は日本の将来、世界の将来を案じて、国のために成るといふことはいかなることかをよく考え、平和な「お国」のために尽くすことを念じていらつしやつたのであらうと私は理解している。

第二次世界大戦が終わると戦争はもうコリゴリだ、もう二度と起こすまいと、誓つたのは日本人のみではない。しかし、何と今日、日本人も含めた世界の多くの人たちは、人類が体験した戦争の無慘さをすでに忘れてしまつてゐるではないか。幼稚園二三〇周年記念にちなんで私が倉橋先生の文章を引用したのは、先生がまさにあの日のために書いておいてくださったように思えてならなかつたからである。単なる私の幼稚園の思い出としてのみではなく、思い出を越えて、一人の立派な幼児教育者の今日、全世界への教えではないだろうか。

(文化・教育・平和諸団体理事)

カナダ・バンクーバー(在住)



倉橋から子どもたちへの伝言

届けられたメッセージ

松井とし

それは平成十八（二〇〇六）年十一月二十五日、お茶の水女子大学附属幼稚園創立一三〇周年記念式典の日の出来事でした。大学の講堂、微音堂で行われた記念式典に引き続き、午後は幼稚園の遊戯室で同窓会主催の祝賀会が開かれていました。

会は卒業生のピアノリスト江戸京子さんのピアノ演奏により始められ、古い写真が次々に映し出されると「あつ、あれは私です」などという声も聞かれ、遊戯室のあちらこちらに懐かしい想い出話や笑い声が満ち、和やかな雰囲気に含まれていました。

そのような中、はるばるカナダから式典にも出席された卒業生コピソン珠子さんにより、倉橋惣三が第二次世界大戦開戦時に年長児だった子どもたちの卒業に際してつぶったことば「大きくなってから思い出してもらおうために」が朗読されたのでした。

「昭和十六年十二月八日。あのアメリカとイギリスとに對する宣戦の御詔書がありました日、あなたは此の幼稚園にいました。この日は、日本は素より、世界にとって、永久におぼえられる日です。あなたは、ほんとうに大きな日に幼稚園にいました。」

開戦の日は、わが国のみならず世界にとつて後に歴史の節目となる重要な日であること。そしてその日に他園ではなく自分と共にこの幼稚園にいたことを忘れないでほしい、という倉橋の強い願いが「ほんとうに大きな日に幼稚園にいました。」という表現に表されているように思われます。

戦争が始まり、子どもたちの大好きな平和の園、幼稚園生活の環境も変わり始めました。戦時下の附属幼稚園の様子は倉橋が著した「子供讃歌」に次のように書かれています。

「幼児らは戦争をよそに楽しく遊んでいる。運動具がある。おもちゃがある。友だちの笑声がある。先生方の笑声がある。砂場に近い小山の下には防空壕が掘つてある。遊戯の時に避難演習の一斉行動も演習してある。幼児たちの間では、ゆうべの警報の噂について、わざとおびえあうような地獄童話も行われるが、それだから、先生はつとめて楽園童話で、小さい非戦闘員の可憐な魂から、

地獄のおびえを除くことにつとめる。―彼自身は巻脚絆に鉄かぶとの身ごしらえ、先生方はモンペに防空頭巾のいでたちを守り、バケツには水を張り、砂を盛り室ごに火たたきを立てると共に、三角巾入りの葉かばんを備えることを忘れず、幾日分かの貯蔵食糧を積み重ねて、身を以て幼児を護る覚悟をしながらも、幼児らには、非常時だからこそ常時以上のなごやかな楽しい幼稚園を与えることにつとめる。」

森上史朗は、故菊池ふじの言葉を紹介しています。

「倉橋は戦争反対者であったが『子どもは周囲からは切り離すことはできない。周囲の人たちのやり方を無視しては保育は成り立たない』という考え方を強くもつていた」^{※2} この考えは現行の幼稚園教育要領に貫かれている幼児期の教育の基本に通じる信念だと思われます。すなわち「本来、人間の生活や発達は、周囲の環境との相互関係によつて行われるものであり、それを切り離して考えることはできない」ということ^{※3}から、幼稚園教育は「環境を通して行われる教育」であることを基本としています。

戦争という負の環境の変化と対峙しつつ、倉橋は子どもたちの心を支える人的環境として先生方と共に心を砕いていたのです。その心境を「幼児と共にいるもの心づくし」という文章に表しています。

「苛烈なる戦下に、今年も暮れてゆくというよりは、年の暮ることなど想う暇もないのが、われわれおとなの心である。(中略)しかし、子ども殊に幼い子らに対しての心づくしは、それとはおのづから別である。幼い子らに対する戦下の心づくしは、一面戦下の少国民として、しっかりと戦時を生活させると共に、また一面、戦時から彼等の生活を護つてその成長を能う限り豊富に充実させてやりたいことである。心に天下の憂いを抱きながら、われわれが日々幼児と共に嬉戯しているのも、この心づくしからに他ならない。(後略)」

与えられた環境の中で楽しみを見つけ、シンガポール陥落を祝う旗行列でさえも元気に行うけなげな子どもたちが降園し、静まり返った園内。あの長い廊下をひたひたと押し寄せる戦争の足音。戦局は悪化の一途をたどる

中、倉橋は子どもたちと社会との狭間に立ち、じくじ 忸怩たる思いでさまざまな方面に気配りをしつつ、幼稚園を守る「盾」になつていたものと推察されます。国の直轄の幼稚園主事(園長)として表だって反戦を唱えることはできなかったのです。

当時の緊迫した状況について、次のようなエピソードが伝えられています。

「菊池ふじの回想によると、倉橋は自由主義者として、軍部ににらまれていたので、『幼児の教育』の紙の配給が受けにくいという理由で、菊池が倉橋の代わりに編集を担当し紙の配給を受けに行っていたことがある」注5

津守真は、倉橋が真正面から軍部と対立し、これを批判しなかったのは、当時、幼稚園の閉鎖令が多く出される中で、幼稚園を守ろうとする姿勢のあらわれではなかったかと語っています。注6

卒園生で照明デザイナーの石井幹子さんは昭和十九年の在園当時を次のように回想しています。

「正門前の「大塚窪町」駅で都電を降りてから校内の銀

杏並木に入ったとたん、警戒警報が鳴り出したのである。

(中略)、玄関に飛び込んでやっと生きた心地をとり戻した。私たちにとって、このがっちりとした建物は、何にも増して安心感を抱かせるシエルターであった。幼稚園の中は静かで、いつものように廊下には、丸窓から差し込む光と、ステンドグラスからもれる優しい彩りの光で、私はやっと人心地ついたものである。」

損傷なく、いまなお愛らしい雛人形や五月人形、日木の架け橋となるべくアメリカからやって来た青い目の人形メリーさんを見るたびに、倉橋と先生方が凜とした強い意志をもってあの戦争と向き合い、子どもたちの心と幼稚園を守り抜いたことを感じる事ができます。

冒頭で紹介した文章の中で、倉橋は戦時中の幼稚園の実情を淡々とつづっています。しかし、最後の一節では「勝利、勝利、勝利。どこまで書きつづけてゆきましょうか。その喜びの中に、あなたの幼稚園を卒業する日が一日々々と近づいて来るのです。」と記しています。ここには「大きくなったら思い出してほしい」と子どもたち

に平和への希求を託した倉橋の真意が込められています。

この文章は公表されず、これまでの倉橋研究にも取り上げられてこなかったとのことですが、六十五年の時を経て、倉橋が愛し、守った附属幼稚園の創立記念の日に届けられたメッセージとなりました。

(淑徳大学専任講師)

注

1 倉橋惣三文庫2 『子供讃歌』二〇〇八年 フレーベル館

2 倉橋惣三文庫7 『子どもに生きた人・倉橋惣三の生涯と仕事(上)』二〇〇八年 フレーベル館

3 幼稚園教育要領解説 平成20年 文部科学省 フレーベル館

4 『幼児の教育』第四十四卷第十一号

二〇〇八年

5 『幼児の教育』第四十四卷第十一号

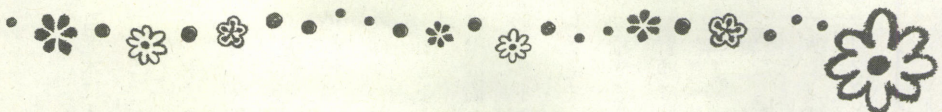
2に同じ

6 『幼児の教育』第八十三卷第十一号参照

7 『時の標』お茶の水女子大学附属幼稚園

フレーベル館 二〇〇六年

(引用文はすべて新字・新仮名遣いに直した)



園のくらしを育む5

園の風景(1) —くらしの中の音風景—

秋田喜代美

1 音の風景

家庭において、食堂には食器や料理の音、風呂場には風呂桶や水の音というように、場所にはその場に固有の音風景があります。一つの特定の音ではなく、それはある活動の中で自然に出ている風景としての音ともいえます。これは、園のくらしでも同様でしょう。この場所に来ると、この音が聞こえてくるというように、園のくらしの中にある音風景です。マリー・シェーファーは「サウンドスケープ^註」とこれを呼びました。近代の生活では、音を環境から切り離し、独立した音楽として認識してきたことを問題として、音を場との関係性の中でもう一度とらえ直し、日常生活や環境において音が風景としてどのようにかかわっているのかを見つめていこうという考え方です。

いろいろな園を訪問させていただくと、そこにはその園固有の音風景があります。


黄色く甲高い声と電子的な音が響く園、木工する音や水を砂場に流し入れる音などが聞こえてくる園、大きな木の葉が風に吹かれる音や池に入る水の音が聞こえてくる園もあります。これは都心か郊外かといった立地だけではなく、その園の中で生まれる活動や子どもや保育者の心のありようにもよるようになっています。音のおもしろいところは、どこからともなく耳に入ってきた音が楽しければ踊り出したり、音に釣られて人がその場に集まり始めたりする力をもっているところでしょう。反対に、いくら大きな音で流されても、それが聴き手の心に届き響くものでなければ、その場の人には生活とかかわりのないノイズにしかならない点です。

2 竹の楽器が醸し出すリズム

高松市保育課が芸術士派遣事業という事業を始めました。音楽、絵画、造形、漆工芸などその土地のアーティストが子どもたちと園で活動を積み重ねていく実践です。

高松市を訪問し園での実践の様子を拝見したり、その芸術士さんたちとお話ししたりする機会がありました。

その中の一つ、鬼無士保育所の周りには竹がたくさんあります。そこで、芸術士の村井さんはその竹を使った楽器作りを園庭でされます。自作楽器を幾つも並べ、村井さんと保育者が園庭で演奏し始めると、長さによっていろいろな音がするおもしろさ



やそのリズムに引かれて、子どもたちが集まってきました。その楽器はペイントされていて見た目にも楽しいものでした。やってみたくて早速たたいたり動き出す子、遠巻きに見ている子、いろいろな子がいます。また、先生ご自身がとても楽しんでいる姿がわかります。五歳児がその中心になっていたのでしょうか。その演奏の傍らで、今度は村井さんがのこぎり等の工具を使いながらその楽器を作り始めます。また、きりの音もします。二人の男の子はその道具やプロセスに興味津々で、真剣なまなざしで見えています。そこで切り出された竹の木くずを大根おろしに見立てる子どももでてきます。最初からその輪を遠巻きに見つつ参加していた四歳のこうちゃん、楽器作りの音を「ギコギコ ギコギコ」と言語化しながら語り始めます。そして今度は恐る恐る片手でバチを持って竹をたたき始めます。村井さんはそれに呼応してたたくことで、次第に皆のリズムの輪が広がり始めます。最初はこわごわだったこうちゃんも、両手で元気にバチを持って一つの竹から、今度はいろいろな竹をたたき始めます。その音がこだまし始めると、園庭の片隅のこの楽器の所に子どもたちが集まってきました。すると、楽器をたたいていた先生は子どもにバチを手渡し、子どもたちと一緒に踊り始めました。園の片隅に生まれた音はリズムにのって踊りの輪をつくり出します。

この園では竹は特別にもたらされたものではなく、裏庭にいつでもあり、またその切られたものは園庭にあつたりします。生活の一部になっているものが楽器という道具になつていく過程に参加しながら、一人の子どもがその活動に参加し、音を楽しむ

過程を見せてもらいながら、この姿はしだいに園の音風景になっていくのだろうと感じました。

園で音をつくり出す経験、また自然に聞こえてくる音に耳を澄ます経験などが身体の中に染み込んでいくことが、音を楽しむ経験になるのではないかと私は思うのです。もちろん、楽器のよい音色や大人が真正な楽器を演奏するのを聴く経験も音楽経験として大事かもしれません。しかし、表現発表会などのために、既成の楽器を限られた時間に練習している風景と、こうした無理のない遊びやくらしの中でその土地にある物の中から、音を自ら生み出したり感じ合ったりしていく風景では、子どもの音経験の相違を感じざるを得ません。私は後者のような経験こそ、園のくらしの風景であってほしいと思います。

それは音の風景だけではありません。味覚、触覚、嗅覚などにおいても同様ではないでしょうか。感覚風景を保育者が再度自覚化してみることで、子どもたちの生活の中であってほしい風景が見えてくるのではないかと感じるので、文字、活字など視覚優位の世界の中でも、園のくらしは多様な感覚風景を大事にしていくことで、その園らしい保育の質を醸成させていくように思います。

(東京大学大学院教授)

参考文献

R. M. シェーファー著 鳥越けい子他訳『世界の調律 サウンドスケープとはなにか』

平凡社 一九八六年

共に歩む

大村禮子

はじめに

筆者はA市の委嘱を受けて、発達支援事業「巡回相談」の相談員として、A市内保育所と幼稚園を継続して訪問してきました。

本誌二月号では「障害をもつ子どもの育ち」についてお伝えしました。その中で「担当保育士の巡回初期の相談は、言葉が出るためにはどうしたらよいか、一人で食べられないために手先の訓練をしたほうがよいのかといった質問が中心で、できないこと

に注目し、できるようにさせたいとの思いが強くていました」と記しました。今回はこの「子どものできないことをできるようにさせたい」という思いを担当保育士が強くもつ背景について触れ、もう一度保育の場で子どもの発達を支えることの意味について考えていきたいと思います。

発達促進のとらえ方

相談機関における乳幼児の発達相談では、「まだ言葉が出ない。発達チェックをしてほしい」と保護者

自身がわが子の発達の遅れを心配して来られる場合と、「保育所（そのほか幼稚園、発達相談室などの関係機関）から発達チェックを受けるように勧められた」と来られる場合があります。どちらの場合も、初めてお目にかかる保護者の方々は、当然のことながら何を言われるだろうかと皆、緊張した心配そうな面持ちでいらつしやいます。

そして発達検査や知能検査を実施して、発達の程度を測ることはためらいを見せながらも、平均的な子どもの発達とは異なるわが子の状態について、納得いく説明がなされることを求めています。年齢が小さければ小さいほどわが子の将来への不安を打ち消し、何とか健常な子どもの発達に追いつかせたいの思いでいっぱいです。検査の結果、その時点で同年齢の平均的な発達から遅れている状態にあるとわかると、発達促進のためにできる実践的な方法を助言してもらうことで「こうすれば大丈夫！」と

の見通しと安心を得たいと望みます。

障碍をもつ子どもや発達が気になる子どもを担当する保育者も同じ思いでしょう。「できないことをできるようにさせること」によって何とか健常な子どもの状態に近づけることが発達促進だととらえる傾向が見られます。

就学というハードル

「できるようにさせたい」との思いを強くするもう一つの大きな背景には、就学に対する保護者や保育者の不安があげられます。園によって保育形態や内容について多少差はあるでしょうが、日々の遊びや生活の中で保育者や友達とのかかわりを通して学び、育つ「保育」の場（幼稚園・保育所）から、主に決められた時間を決められた内容の集団学習に向かう「教育」の場（学校）への転換は、障碍をもつ子どもや発達が気になる子どもにとって、大きな負担と

なることが予測されます。筆者がかかわるA市でも、近年、保育者の不安を反映して、巡回相談に挙がる対象年齢が、就学を意識する四歳から急激に増し、五歳が最も多くなっています。

保育者はこの就学への移行をスムーズにさせたいと思ひ、保育の場での子どもを育ちを認めながらも、このままでは不安、就学後の集団に適應できるようになってほしいと願ひ、「できるようにさせたい」思ひを強くしてしまうのではないだろうか。巡回相談を行う前に担当保育士に記載をお願いする巡回相談カードの中にも、就学期を間近に控えたクラスの担任から、「このまま就学し、学習が始まってしまふのは担任として不安を感じる。どう援助して就学に備えていけばいいか？」といった質問が目立ちます。

特別支援教育が推進され、障得をもつ子どもたち一人ひとりの教育的ニーズに応じた適切な指導や必要な支援がうたわれていますが、地域や学校によつ

て内容はまちまちです。さらに保護者の希望もあつて、通常級に在籍する子どもたちが多いのも実情です。就学時には所属クラスの自分の席に45分座つていられることや、一人の教師が多数の子どもたちに対して、教える内容を理解できる力をつけておくことが必要との考えが一般的であり、保育者たちの不安をかき立てているようです。

保育の場で育てたいこと

保育所保育指針第2章子どもの発達の中で「特に大切なのは、人との関わりであり、愛情豊かで思慮深い大人による保護や世話などを通して、大人と子どもの相互の関わりが十分に行われることが重要である。」と述べられています。

人とのかわりは生まれて間もない乳児期から始まり、養育者との間で育まれますが、目に見える知的な発達ばかりにとらわれず、子どもの育ち全体に

目を向けることが大切です。そのことを再確認していただくため、相談機関での一つのエピソードを紹介したいと思います。

二歳の時に母親が失踪し、一時保護されたCは、いったんは里親さんに預けられました。ところが、夜眠れない、トイレではない場所での排便が続く、緊張する場面で表情がこわばり、黙ったまま身体が硬直してしまうといった心配な状態が表れ、三歳の時に児童養護施設に入ることになりました。実の母親が突然いなくなり、母親代わりとなった里親さんのもとからさらに新しい集団生活の場に移され、当然のことながらしばらくの間、大人に対して確かな信頼関係を築くことができませんでした。当時、言葉のやりとりはそれなりにできましたが、絵を描く、物を作るなど、手先を使うことは苦手で、発達についても気になるところがありました。

一時保護期間には慣れない人や場所に対しては表情がこわばり、身を固くしましたが、やがて、安心できる場所と人に対しては笑顔が見られ、自分からかわりを求めるようになりました。一方で筆者が脱いだ靴にわざと泥水をかけて「くつにどろかかっちゃった」と、反応を試すかのような行動が目立ちました。

児童養護施設に移ってから、担当保育士の話では、段差のあるところで、ほかの子どもを突き飛ばす、ほかの子どもが嫌がることをしては怒られるといった行動が頻繁に見られ、人とのかわりがうまくいかないことが多いようでした。

施設入所時から継続してCの担当となった保育士は、ほかにもたくさん担当の子どもを抱えながらも、毎日の生活の中で時間の許す限りCの気持ちに寄り添い、わが子のように愛情をかけて人とのかわりを育てていきました。Cも保育士を

慕い、「一番好きな人」として担当保育士の名前を挙げるようになりました。筆者もCとの遊び場面や担当保育士の話から、一つひとつの行動の意味を一緒に考え、共にその成長を見守りました。

そして施設に入ってから一年二か月経ったある日、筆者が行った知能テストの中で、「目は何をみるものですか？」との質問に対して、Cは「にこにするの」と答えました。この時、筆者は正答とされる答えよりもはるかに素晴らしい人への信頼を手に入れたCのことを担当保育士に伝え、一緒に喜びました。

この時のCにとって、目は単に見るという機能のあるものではなく、人への優しさを向けるものだという理解に筆者は感動しました。これこそ倉橋惣三の『育ての心』の中にある保育者からの「にじみ出る真実性」が日々向けられることによって、子どもの心に大切なものが育った証ではないでしょうか。

担当保育士からは、このころ、それまで折れなかつた飛行機を一人で折れるようになり、絵も描くようになったと報告を受けています。笑顔に囲まれた安心できる環境を得て、ようやく自信をもって物事に取り組む意欲が出てきたのでしょう。

共に歩む

近年、さまざまに細分化された専門的な情報が保育の場に入り、高い専門性を求めるあまり、子どものことを真剣に考える保育者を悩ませる結果となっている気がします。保育者自身に心のゆとりがなくなれば、子どもたちにもゆとりは生まれません。保育の場には、はっきりとした障害をもつ子どもにとどまらず、虐待を含むさまざまな家庭背景をもつ子どもや発達が気になる子どもたちがおり、一人ひとりに、充分かわってあげたいけれどもそれが難しい職員配置状況があります。保育者だけにその重責

を担わせることなく、子どもにかかわるすべての関係機関やそこに携る専門家が、日ごろからそれぞれの立場を理解して協働できるように交流していかなくてはならないと思います。

さらに、行政の制度利用には一定の条件が必要とされています。地方自治体によって多少異なりますが、A市では障碍児保育制度利用対象となる子どもたちに加配の保育者がつくためには、4級またはそれよりも軽い身体障害者手帳を持っていることや、中々軽度の療育手帳の交付を受けていること、または児童相談所などにおいて中々軽度の発達の遅れがあるとの証明をとることが必要です。

それは、まだこれからどこまで発達していくか推測するしかない子どもに対して、早くから「障碍」や「発達の遅れ」というラベルをつけるような行為ともとれ、制度の利用は保護者にとってはとても抵抗のある選択だと思っています。保育者はこうした障碍

をもつ子どもや発達の気になる子どもを抱える保護者に対しても、子どもへの対応をめぐって、その胸に抱える思いを測りかね、否定的になってしまふことがあります。しかし、保育者は保護者の最大の理解者であり、協力者であってほしいと思います。保育者をはじめとして、医療、教育、関係機関など、子どもの発達を支えるすべての人たちが心にゆとりをもって、子どもに「できないことをできるようにさせる」という結果を追い求めることよりも、まず、安心して笑顔で毎日の生活を送れるようにするにはどうしたら良いかを考えることが大切でしょう。「できることがあることは楽しい」と思える心情と「もつとできるようになりたい」という意欲と物事に取り組む態度を育てることを重視し、長い目で見た子どもとの成長を共に喜べるように保護者と子どもと共に歩む姿勢が大切だと思っています。

(淑徳短期大学兼任講師)



保育

の

創意工夫

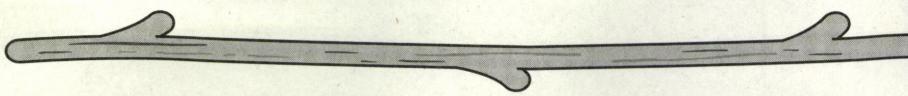
8

自然の中の一泊キャンプ

前原 寛

保育園に夏休みはありません。しかし、併設されている学童保育の子どもたちが朝からやってきて活動するようになります。保育園でも夏休みを実感します。普段から園児と学童児の交流はありますが、それを活かして八月上旬に、四、五歳児と学童児合同の一泊キャンプをします。

私のかかわっている保育園は、鹿児島県でも過疎化が進行している地域にあります。保育園から車で30分ほど離れた山間部に、廃校になった小学校があり、その跡地がキャンプ村として整備されています。一泊キャンプを毎年そこで実施しています。標高は約700mと高く、周囲に人家もほとんどないような所

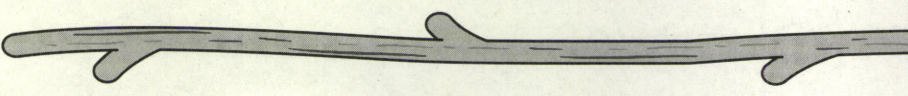


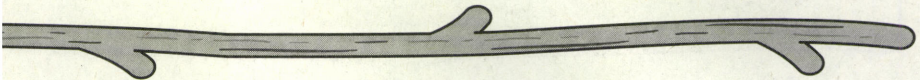
です。ログハウスやテント、かまどなどが装備されていますが、売店や自動販売機などはありません。小学校のあった場所ですので、危険もなく、思う存分遊び回ることができ、子どもたちには最適の自然環境です。

一泊二日の日程ですが、公共交通機関は通じていませんので、キャンプ場までは貸切バスで往復します。昼前に着き、アスレチック遊具などのある近くの広場で遊んだ後、キャンプ場に戻ります。かまどを使って夕食を準備し、みんなで夕食を食べ終わると暗くなります。夜はキャンプファイアーを楽しんで、就寝です。翌日は、朝早くから起き出します。朝食の後、スイカ割りなどを楽しみ、昼前にはバスで保育園に帰るといふ日程です。

ここでのキャンプの目的は、便利な生活を離れて、自然と一体となった時間を過ごすことです。料理にはかまどを使いますが、子どもたちも一緒に行います。ご飯も、飯盒はんごうではなく羽釜はなべで炊きます。ガスや電気ではなく、薪から火おこしすることを、子どもは身近に体験します。

キャンプをすると、若い世代の保育者は火を扱えなくなっているのがよくわかります。ある世代から上は当然のように火をおこせるのですが、その技術が断絶しています。子どもたちのころにキャンプをした経験はあっても、それが身につくまでに至っていないのです。





そのキャンプ場はほかに利用者がほとんどいないので、気兼ねなく活動できる良さがあります。以前はほかの幼稚園や保育園も利用していましたが、キャンプ村の設備をそのまま使用している園はありませんでした。

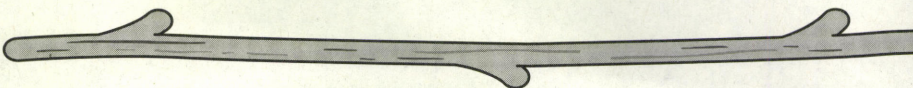
ある幼稚園は、最新式のアウトドアグッズを持ち込んでキャンプしていました。ポータブルコンロで調理をし、エアドーム式のテントを張り、随所に快適さを保ちながらキャンプをしていました。

ある保育園の場合、夕食作りは保護者の担当でした。保護者が作っている間、子どもは保育者と別の活動をし、準備ができたら夕食を食べていました。子どもも保育者も、料理作りに参加する姿は見られませんでした。

このように幾つかの園と一緒にキャンプをする機会がありました。いずれも快適さや簡便さを求めるようなやり方でした。何のためにキャンプ村まで来るんだろうと思ってしまうましたが、そんなキャンプでもおっくうになってきたのか、近年は他園のキャンプを見かけなくなっていました。

当園では、食料品などを除いて持ち込みはせず、キャンプ村の設備だけで過ごしています。そこでしかできない体験を子どもたちにしてほしいからです。

テントも、昔からある三角テントです。小さなテントに、子どもは保育者と一緒にぎっしりと並んで寝ます。懐中電灯を消せば暗くなります。



当園のキャンプを話題にすると「子どもが怖がりたり泣いたりしませんか」と質問されることがよくありますが、そんなことはありません。子どもたちは、信頼している保育者と一緒に、とても楽しく過ごしています。

ある年には、こんなことがありました。雲一つない澄みきった夜、木立の間から星のきらめきが小さな宝石のように見えていました。何の心配もせずテントで寝ていましたが、その夜半、突然の雨音で起こされました。通常の家屋と違い、至近にあるテントの屋根に落ちる雨だれの音はきわめて大きく響いています。こんな大きな音がしたら子どもたちが驚き不安がるのではないかと、傘を差してテントを見回りましたが、特に変わった様子はありませんでした。

翌朝はきれいに晴れ上がり、朝日が輝いていました。夜半の雨がうそのようです。子どもたちがにぎやかに起きてきます。保育者に夜中の雨のことを聞いてみると、あの雨音の中でどの子ども不安をみせず寝ていたということです。思いがけない自然の姿に出合っても、保育者が本当に落ち着いていれば、子どもはむやみに騒ぎ立てないということがわかった貴重な体験でした。

雨を身近に感じながら過ごした時間。そんな思い出をつくってくれるのも、自然の中のキャンプだからこです。

(鹿児島国際大学准教授・元安良保育園園長)

保育の原点を案内する一冊

— 『新しく生きる』を読む —

宮下美智代

津守真先生が『幼児の教育』の編集に長く携わってこられたことは、皆さんご存じであろう。本誌に寄稿された津守先生の連載を基に研究者や保育者たちが語り合っている『新しく生きる』（津守真・浜口順子編 フレーベル館 二〇〇九年）が刊行された。

私が大学時代にお世話になった津守先生の授業を、いま一度受けてみたいと思っていれば、それに「はい、どうぞ」と応えてくれるように『新しく生きる』が出版された。

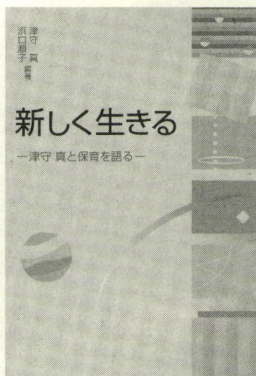
私が読みすすめたままに、順に見ていこう。

第2章「子どもの成長」の中の「天国からの種」

から。愛育養護学校を小学六年生で卒業する子どもの母親が、パウロの言葉をひいて校長の津守先生に次のように言ったという話が紹介されている。「私たちは知っているのです。苦難（トラブル）は忍耐を、忍耐は練達（経験）を、練達は希望を生むということとを、希望は私たちが欺くことはありません。」

私たちはさまざまな問題の中で生きている。津守先生は病を乗りこえられ『新しく生きる』と題して本を出されている。私も希望をもち、新しく生きたいと心から思う。幼児教育にかかわるものは、こう





いうひそやかなものを頼りに、それぞれの仕事をやり続けていくのではないだろうか。

「世界はよい方向に向かって前進していると子どもが感じるようにするのはどうしたらいいだろうか。」この津守先生の言葉から強い思いが伝わってくる。津守先生の平和への希求、切望はずっと続いている。私たちこそ、それを受け継ぎながら保育に向かわねば。

津守先生の「天国からの種」と「五歳児への成長」という文章を受けて、お茶の水女子大学附属幼稚園の宮里さんが「子どもが始めたことを大事にするということ」と題して日常の事例をあげつつ、子ども

と過ごすかわりの大切さを教えてくれる。このころも読むたびに発見がある。

昭和四十二年、私は大学を卒業して祖父母が住む長野県の本曾で就職した。創立四十五年目を迎えた古い小さな幼稚園。東京で資格を得てこの地に嫁いできた祖母が、大正時代に設立した幼稚園であった。

その当時の日本は高度経済成長へと向かう最中で、保育者の募集もままならぬ時代であり、目に見える結果主義がまかりとおる世相の中、「今日Aちゃんがこんなことをして……」と喜びながらも、時には先が見えなくなり立ち止まることもあった。

私は考えた末、『幼児の教育』を教職員に一人一冊買ってもらい読むことにした。輪読会を週一回もつよう努めたのである。子どもを語る時、多面的なとらえ方はむろん大切であるが、共通の地平に立ちたいものである。この輪読会を重ねるうち『幼児の教育』によって光が差し込まれ、職場の学び合いができるようになった。事情あって五十余年経て、祖母の幼稚園に公立化の道が開き新生した時には、初めて幼稚園とかわかる教育委員会の事務局の方々に

も『幼児の教育』を勧め、幼稚園、幼児教育の理解を新しくしていただいたこともある。

木曾幼稚園の遊びの中に音楽やリズムを取り入れていき、子どもたちが半年にわたる「海賊たちと宝島ごっこ」が展開した事例を、教育課程全国研究会で長野県から発表したことがある。なんとその時の記念講演が津守先生で、題目は「保育の一日と人間の成長」であった。自発性、矛盾の肯定、自我の成長、人間を育てる保育などについて語られた。津守先生が私たちの保育を見てくださった、との思いを忘れることができない。

第4章「エリクソンに学ぶ」は、エリクソンの、これまで語られてこなかった部分に触れるものだった。どんな立派な人でも、皆それぞれの重荷を背負っている、だからこそ社会に返していこうと歩み続けることを知らされた。

第5章「戦争・歴史・歩み」の中で、津守先生は「流されずに生きる」と題し、先生が歩んで来られ

た道のりが語られる。息次ぐ間もなく読み入る。

そして、第6章「保育と平和」では、OME P（アジア太平洋地域幼児教育・保育国際会議）を通じて津守先生が世界平和へ向けてされたことへと話題が広がっていく。横浜を会場としてOME P世界大会が開かれた。津守先生は会長と大会準備委員長も兼務された。「参りました、世界中からファックスが来て夜中じゅう。休む部屋に電話機をおいたのがねえ」。これが一九九五（平成7）年であった。

ここで、私の記憶は、そこからちょうど十年前にさかのぼり、私も立ち会ったある出来事に至る。つまりこのOME P世界大会に先立って一九八五年には、日米欧幼児教育・保育会議が日比谷公会堂を会場にしてフランス、スウェーデン、アメリカ、西ドイツから代表者を招き、シムボジウムが行われた。これこそ当時の東京都私立幼稚園連合会が中心となり、文部省（現文部科学省）、厚生省の枠を超えて公私、幼保の組織の方々の協力でなした会合であつ

た。そこでは「就学を五歳に」という経済界からの声の中、「六歳がやはりふさわしい」という各国の、また日本の実情が話し合われた。子どもが「ゆつくり大きくなる」ことを保障しようとする趣旨であったと記憶している（参加者はOMEPPのグタール総裁、チューリッヒ大学のデュバルク教授、アメリカのバーガーIACEI副総裁、スウェーデンのシル女史、ドイツのモスカル女史など）。

津守先生と松村康平先生（元お茶の水女子大学教授）がここに大きくかわっておられたが、その当日、日比谷公会堂の鍵をあける仕事までなさっておられたことには驚かされた。保育学を支えるということは、ここから始まるのだと思ひ知らされ、深い感動と共に忘れられない。

第7章「保育が目指すもの」では「高尚な精神を育てる教育」を津守先生が語り、浜口さんが「地を這うことと高尚さとの間に」と題して応答される。

津守先生は「子どもの心には、高みの光へと向かう

心がある。それを高尚な精神へと育てるのが教育の力であろう。そこから本式の教育が始まる」と言う。

そして、それを担っているのが大人であると。こうした文章に触れながら、津守先生の世界に入っていくと、先生が一人の時、聖書を開いておられるお姿が感じられる。保育を学び、そしてそれによって癒されるのは深い信仰心をおもちだから。近づきたいと思う。

本書は、開いたどこの頁からも読み始めることができ、いつの間にか津守ワールドに入っている。それを助けてくれるのが、各章で津守先生の文章に応答文を書かれている専門の方々である（友定啓子、宮里暁美、西原彰宏、井原成男、柴崎正行、大戸美也子、浜口順子各先生方）。

保育の原点を爽やかな風によって案内してもらえそう。緑陰で開くにお勧めする一冊である。

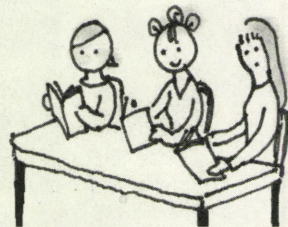
（東京家政学院大学非常勤講師）

関係的存在といわれる

人間へのまなざし

—『人間関係—かかわりあい・育ちあい』を読む—

西脇二葉



「人間は関係的存在である」

物質的な豊かさとは精神的な豊かさは比例すると信じて、われわれ日本人は今日の技術の発達を遂げしてきました。その結果、健康でありさえすれば衣食住どの面においても、誰の助けも得ずに生きていくことができようになりました。効率的で衛生的で快適な生活環境の中で、自由気ままに生きていくことの幸せを誰もが享受できるものと思ってきたのです。

しかしながら、昨今の日本では自殺者が後を絶ち

ません。利便性の享受を追求し続けた結果、多くの日本人は自己を失いかけているのではないのでしょうか。

幼稚園や保育所の保育内容研究の領域「人間関係」のテキストとしてだけではなく、広く「人間関係論」あるいは「保育指導法」「保育方法論」、また保育を全体的にとらえるためのテキストとして編集された、畠中徳子、赤井美智子、吉川晴美、日吉佳代子、宮下美智代、春原由紀による『人間関係—かかわりあい・育ちあい—』（不昧堂出版 一九九六年

初版発行)には、人間の在りようを、人と、自己と、物とのかかわりから定義した松村康平の理論が紹介されています。

「自己、人、物とのかかわり」のとりえ方

松村は、人間の存在の仕方について、以下の基本原理を用いてとらえることができると言っています(本書P15より)。

- 1 「人間は、関係的存在である。」
- 2 人間は、自己や人や物とさまざまにかかわりながら、生活している。
- 3 自己や人や物のかかわり合う、その関係の仕方は内在、内接、接在、外接、外在の五つに分けて把握することができる。

この松村の理論を本書の中で赤井美智子はオー・ヘンリーの有名な物語『最後の一片』を用いて次の

ように解説しています(本書P20～25を筆者要約)。

『最後の一片』には、絵描きを志す病身の若い娘(ジョンジー)とそのルームメイト(スウ)、そして気難し屋で二人とは倦厭けんえんがちな関係であった同じアパートに住む絵描きの老人(ベアマン)が登場します。病身を憂い、自暴自棄になっているジョンジーが、ベアマンの渾身の力で描いた一枚の蕨つたの葉によつて自己を取り戻し、生きる意欲をもつに至るという話です。

まず、「ジョンジーの自己」と、看病するスウとベアマンの「愛情あふれる二人の人間の働きかけ」、そして「蕨の葉」の三つの要素が、さまざまにかかわり合い、変化していく場面展開は、上記の1・2の原理に対応します。

散りゆく蕨の葉と自己の病状を一体化させてしまうような、蕨の葉とのかかわり方(自己の物へのかかわり方)は、内在的なのかかわり方として把握することができます。

しかし、強く内在化していた一葉が二晩続きの強い雨と風に吹き飛ばされることもなく壁の上の蔦にしがみついていた事実には、ジョンジーは直面し、奇跡のように散らない一葉に何か大きな力の働きの現れを感じ始めます。

どんなに激しい嵐にあつても散らない最後の一葉に強靱な生命力を与えている大きな力の存在を実感させられたジョンジーは、(それと一体化させていた)自己の生存をも支えてくれる大きな力の実在も確信できるようになり、生きる意欲を取り戻せたということになるわけです。

ひとたび若い命が生命力を回復し出すと、自己、人、物へのかかわり方の変化・発展は、次に示すように、非常にダイナミックに相互媒介的に展開します。

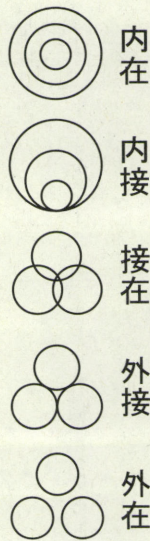
・自己関係—食欲がでてくる。身だしなみを整えようとする意欲がでてくる。

・対人関係—スウへの関心が快復し、スウの働く

姿を見たがる。

・対物関係—長年の夢(ナポリ湾の絵を描くこと)を実現させようとする意欲の復活。手仕事を楽しむ(肩掛けを満足そうに編む)。

理論を図示化すると、以下ようになります。



本書の特色は、このように人間の存在の仕方と関係(かかわり方)のとらえ方についての原理を示し、事例を通してこの原理の理解ができるように工夫がなされている点にあります。

前書きには、「私たち人間はみな社会生活をしており、『人間関係』無くしては生きられず、より良い人間関係を築くことで、平和な世界を維持していくこ

とができると言えよう」とあり、平和な世界の構築は、人間関係の回復が基礎となることをうたっています。

本書を使った授業から

保育者を養成する立場にある私は、「保育内容研究A—子どもと環境・人間関係」という一年生の後期に開講する授業の教科書として、本書を使用していきます。

本書を授業テキストとして選択した理由は、保育経験の浅い学生が関係学の理論を用いることによって、現場で起こるさまざまな問題を客観的かつ多面的にとらえられるようになってほしいと考えるからです。そして、この授業において強調して理解を促すところは、関係図の部分において、人と物とのかわりの接点部分と同様に、どこにも重ならない自己の部分の存在の在りようも重要であるというところからです。

理論を実践的に理解すべく、「誰かのことを思っ
て物を作る」という課題を出します。キャンパスに隣接する井の頭公園で手に入るものを利用してプレゼントを作成し、受講仲間三人一組のグループを編成し、プレゼント交換をするというものです。

季節は、ちょうどクリスマスころとなります。赤く染まった葉っぱや木切れを使った写真立てや、石ころで作った置き物、ネックレスなど実に多種多彩な贈り物が登場し、歓声と悲鳴（！）がそこかしこで上がります。

毎回授業後にリアクションペーパーをとりませんが、この時は、プレゼントを贈った時と、贈られた時の二つの立場からの感想を書いてもらいます。

私の予想としては、「うれしかった!」「感動した!」「感激した!」という、平板な感情表現が連なるものと思っていたのですが、意外にも、細やかな心理描写、それも自己に向けられた内省的な言葉でつづられているものが多いことに驚かされました。

思わず、私が吹き出してしまったものを一つ紹介
しましょう。小枝を数字に見立てたカレンダーを
作ってきたこの学生は、クリスマスツリーを贈られ
ることになりました。以下は、彼女の感想を原文の
まま引用します。

・贈った時——申し訳なすぎだった。すぐ
捨ててねと言って渡したけど、「大事に使う
よ」と言われ、心苦しくなった。○○ちゃんは
優しいから、本気でこのぼろいカレンダー飾っ
てしまうように思う……。情けなくてマジ泣き
がはいった。
・贈られた時——マズつついと思った。恥
ずかしい……。泣きたくなった。

誰もが大作と評価するカレンダーを、得意満面に
持参して臨んだものの、自分の予想をはるかに上回
る贈り物を目にした彼女の心境の落差を想像し、私

は思わず笑ってしまったのです。

ここで注目したいのは、贈る時も贈られる時も、
自己の内省的感情が先にたつていてという事実です。
自分の作品に酔いしれるということは、すなわち、
贈られる人もさぞ喜んでくれるだろうと勝手に思い
込むことです。

このような「贈る相手の思い」と「自己」と「作
品」が内在化している状況が、人とのかわり、ほ
かの作品との比較において、自分の作品を客観視す
る機会となったこと。そして、自己をみつめた結果、
「友人」と「作品」と「自己」とが接在的かわり
になるという関係性の発展がみられるということだ
す。

リアクションペーパーをもとに、こうした理論の
解説を重ねることで、人間関係の問題を解くカギは、
人間同士のかかわりだけでなく、実は物とのかかわ
りも大きな要素であることを、学生は認識していま
す。

そうして、「自分で作ったものと誰が作ったかわかる物」に囲まれた生活と、「誰が作ったかわからないもの、自分は何も作らずただ消費するだけ」の生活との違いに思いが至る時、学生は実に神妙な顔つきをします。

物を通して、人の心と自己の思いを知る。作り手の心と使うものの心が接在共存の関係であることを、実に忘れやすい状況の中で私たちは生きています。それは、人の思いに触れる機会をなくすことだけでなく、自分自身の思い、すなわち自己を見いだす機会もなくしているということでしょう。

物の実相・人間の实相

物を作るだけでなく、その物を通して人とかわかること。本書をもとにした授業を通して、私が見つめられたのは、物の実相をとらえることは、明るく、豊かな気持ちになるということです。

先ほど紹介した授業のリアクションペーパーも、

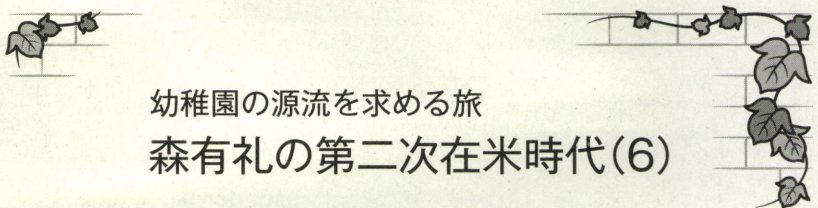
友人の新たな一面や、自分自身の一面を見いだした楽しさやうれしさをつづつたものが多くを占めています。

物作り大國日本と称されるように、日本人は、丹念に身の回りの物を作りながら、自分たちの生活を営んできました。それだからこそ、今日の利便性の高い生活様式がもたらされたことは、世界の中でもとりわけ日本人にとっては大きな精神的打撃となっているのではないでしょうか。

物とのかかわりにおける危機状態が多く日本人の自己を見失わせ、自殺者の増加を招いている。このように考えるのは、想像に過ぎたことでしょうか。

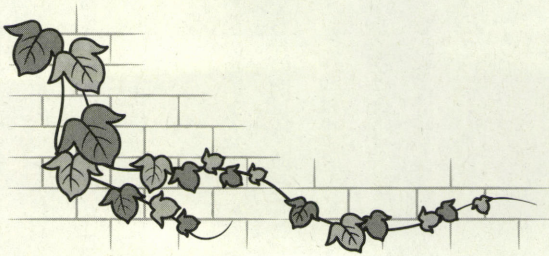
いかなる状況下にあっても、明るい希望をもって生きていくこと。人間が生きる原理を解き明かすきっかけを、多くの人に見出してほしい。そのような期待をもって、本書をここに紹介させていただきます。

(立教女学院短期大学専任講師)



幼稚園の源流を求める旅
森有礼の第二次在米時代(6)

北海道開拓使派遣女子留学生の教育



国吉 栄

二度目のポストン

二〇〇八(平成20)年、二度目にポストンに行った時、私には調べもののほかに楽しみにしていることがあった。私の関心三研究に興味をもって連絡をくださった日本文学研究者と、お会いする約束をしていたからである。

ハーバード・スクエアの、地下鉄から地上に出たところにある雑誌屋の前で待ち合わせた。すぐにわかった。屋外のベンチでコーヒーを飲みながら、話題は私の旅行の目的である森有礼にも及んだ。

「森有礼はいわゆる西欧かぶれと言われていますね」

「いえ、そんなことはありません。彼はむしろ西欧と闘ったのです」私は少しむきになって答えた。

「何か具体的な資料でもあるのですか」

「もちろんあります。たとえば、駐日公使デロンクと闘った資料を見つけました。当時デロンクと闘った日本人などいたでしょうか」

「それでは彼の英語採用論はどう考えますか」

「そうですね……」

まったく違和感のない日本語に驚嘆する暇もないほど、自然に意見を交換し合い、心地よい時間を過ごしたのち、ハーバード大学の構内を案内してくださった。ちょうど新人生の入寮の時期で、歓迎のテントが幾つも張られ、色とりどりの風船が揺れてにぎやかだった。

「これがハーバードさんの像です。でも西郷隆盛の像と同じように、本当はどんな顔だったのか、わからないのですけどね」

新人生が晴れやかに、次々と、家族や友人たちと一緒に「ハーバードさん」と写真を撮っていた。

広い構内を巡り、数ある図書館の利用手続きや学内で食事をするにはどこがいいかなど、私にとつて大切な情報をたくさん教えていただいたおかげで、それから十日ほどの調べものは大いにはかどったと思う。紹介いただいた同大学の東アジア研究の拠点である燕京^{イェンチン}図書館のライブラリアンからは、森関連の珍しい文献を見せていただいたりもした。

森有礼と岩倉使節団に伴われた少女たち

明治四（一八七二）年末、世界の中に生きる日本の形を求めて岩倉使節団が出航した。使節団には北海道開拓使から派遣された五人の少女が同行していた。最年少の津田梅子は航海中に満七歳の誕生日を迎えた。渡航中は手がないため、少女たちは同行した駐日公使デロングの夫人に託された。先にふれた森のデロングとの闘いは、彼女たちの処遇に関するものである。もし森がデロングと闘い、それに勝たなければ、梅子が「ランマン家の娘」になることはなかったし、現在の津田塾大学が創設されることもなかったのではないか。

積雪のため、使節団は予定を大幅に遅れて、翌年二月二十九日にワシントンに到着した。駅頭に出迎えた森は少女たちを引き取るため、秘書ランマンを伴ってデロング夫妻に面会した。しかし夫妻は引渡しに難色を示し、使節団の正使岩倉具視に問い合わせたのちに汲々応じた。少女たちはその夜からランマンら個人宅二軒に預けられ

た。翌三月一日、森はデロング夫人に少女たちの渡米同伴について感謝の書状を送った。だが、ことはそれでは収まらず、デロングはそれから三か月以上にわたり、あらゆる手段を用いて少女たちの返還を要求し続けたのである。北海道大学北方資料室には、これに関する森とデロングの書簡の写し十数通が所蔵されている。

「出航の際に両親や親族から娘をよろしくと頼まれた。だから彼女たちの保護監督権はわれわれにある」

「少女たちの責任は私にある。どこに行き何を学ぶのかわからなければ送り出すことはできない」

「ヴァッサー・カレッジ入学が親たちの希望である。一官吏に過ぎないあなたに何の権限があるというのか。あなたでは話にならない。岩倉大使と話をつける」

「大使はこの件について権限をもっていない」

デロングは怒った。開拓使次官黒田清隆に「森に権限を与えたというのは本当か。少女たちがしかるべき学校に入るまで、われわれが保護監督する約束ではなかったのか」と手紙を出し、岩倉や使節団の副使木戸孝允にも

重ねて訴え、少女たちを引き渡すよう繰り返し迫った。

この間、森はきわめて困難な立場にあった。早くも三月十一日には幕末に結ばれた不平等条約の改正交渉が始まった。伊藤博文と森が交渉開始に積極的であったといわれるが、日本側は米国側から条約改正の全権をもっていないことを指摘され、ほとんど相手にされなかった。やむを得ず、勅許を得るため、伊藤と太久保利通が急きよ帰国することに決まった。森は自分の無能を理由に辞表を書き、帰国する二人に託した。

岩倉・木戸は、伊藤・森の言葉をいれて改正交渉を始めてしまったことを悔やんだ。二人の帰国後、森への風当たりは強くなる一方であった。木戸は「森らのごときわが国の公使にして公然外国人中にてみだりにわが国の風俗をいやしめる風説あり」(『木戸孝允日記』一八七二年四月十五日)、「森がしきりに教育のことに口を出す。彼が教育分野にすれば国のためにならないから反対せよ」(井上馨宛書簡同十八日)と書いた。こうした中、デロングの執拗な要求がなされていたのである。

岩倉はデロングにねじ込まれ、早い時期に腰が引けてしまっていた。しかし、こわもての米国大使に対し、若造森有礼は一步も引かなかった。デロングは岩倉・木戸に、森の外交官としての資質への疑義や、彼の主張の不当性を強く訴えていたから、「森がしきりに教育のことに口を出す」という木戸の非難の言葉には、彼女たちの教育をめぐる具体的なやりとりも含まれていたはずである。このとき森がデロングの言うままになっていたら、満七歳から十四歳の、まだ言葉もわからない少女たちはどうなっていたであろうか。森がデロングの前に立ちはだかり、あくまでも主張しなかったら、岩倉は彼女らをデロングに引き渡していたのではないか。

ワシントンに到着した年の秋に梅子が書いた作文がある(吉川利一『津田梅子』昭和五年)。直さず原文のまま引用する。そのままのほうが、寄る辺ない彼女たちの気持ちがよく表れているように思えるからである。

「A lady named Mrs. Delong took care of them, first all the girls think her very kind.」渡航中彼女たちはデロング夫人に託

された。「少女たちはみな、はじめは夫人をととても親切だと思った」。ところが行く先々で着物や髪型を珍しがられ、見世物にされたり、たびたび怖い思いや不快な経験をした。当初はサンフランシスコで洋服を調えることになっていたようであるが、夫人は着物のほうがよいと言って、彼女たちをいつも振袖姿で連れ回した。そうした経緯もあつたのであろう、夫人評は次のようになった。

「Mrs Delong was not kind first the girls was very nice but last was not kind.」少女たちはみな、デロング夫人を「はじめはとてもいい人だと思っただけで、最後には親切な人ではないと思つた」のである。北海道大学資料には、森が「デロング氏の所に行くのは彼女たちの意思ではない」と言っている文面があるが、森の主張には少女たちのこうした感情や意見も反映されていたであろう。

森は少女らの教育について識者に相談の上、臨時措置として、五月末から家を一軒借りてペスタロッチャーの教授を学んだ住み込みの教師を雇った(森がこうした早い時期に教師の採用条件としてペスタロッチャーに言及し

ていることは注目に値する)。個人宅からそこに移った少女たちは、午前中に二時間英語を学ぶほかは自由で過ごしていたようである。日本弁務使館の当時の書簡ファイルには、音楽レッスン費用の支払いに関する手紙もあるから、ピアノも習っていたのであろう。ランマン夫妻がしばしば様子を見に行ってくれた。日曜日には弁務使館に遊びに行き、森や官員に相手してもらったり、どこかに連れて行ってもらったりしたという。後年、梅子はそれらの日々を「Those were golden days for us」と振り返った。家族と遠く離れた異国の地で、golden daysと呼べる日々を送れたことは、少女たちにとって幸いであった。他方、あくまでも少女たちを取り戻そうとしていたデロンクが、「ヴァッサー入学まで少女たちをどうしようというのか」という森の問いに答えて、最良の委託先として挙げていたのが寄宿学校であった。デロンク書簡には、ある寄宿学校経営者の、「私は少女たちの安全を守るため、彼女たちを寮生と私の家族以外の人間とは接触させません」という言葉が記されていた。この時、

少女たちがこうした場所に送り込まれていたら、果たして後年の彼女たちの開花はあり得たであろうか。

森は少女たちを見守りながら、彼女たちを託し、本格的に教育を受けさせることができる信頼すべき家庭を探していた。この間、彼女たちに（実際には最年少の梅子とその対象であったと思うが）幼稚園教育を受けさせようという話がもち上がった。

ワシントンの幼稚園

アメリカの幼稚園運動の担い手の一人ジョン・クラウスは森の駐米時代、教育局でイートンの助手をしていた。その後、エリザベス・ビーボデーに招聘されてニューヨークで幼稚園を開いたマリア・ベルテと結婚して幼稚園教師養成所を創設し、夫妻で幼稚園運動を牽引する。その彼が一八七五（明治8）年にビーボデーに宛てて書いた手紙が *Kindergarten Messenigen* に掲載されている。

かつて大戸美也子氏がこの手紙を紹介されたことがある。当時、同誌は経済的な危機に直面していた。同誌の存

続を望むなら定期購読者を獲得してほしいというアピールが、毎号誌面に掲載されるようになっていた。

「私は日本からの定期購読者を二人獲得することができません。ワシントンの元公使森氏がどんなに教育のことに興味をもっていたか、あなたもよくご存じでしょう」

(*Kindergarten Messenger* Vol. III, No. 6 June 1875, p. 139)

森は条約改正交渉からんで大久保・伊藤に辞表を託してから一年後の、一八七三年三月末に米国をあとにしていた。*Kindergarten Messenger* が創刊されたのは、森が去った直後である。クラウスは、「彼がどんなに教育のことに興味をもっていたか、あなたもよくご存じでしょう。彼なら *Kindergarten Messenger* を定期購読してくれませよ、そう思いませんか？」という口調なのである。



続けてクラウスはこう言った。「ちようど三年前のことです。六人の日本の紳士がイートン長官と私に伴われてワシントンの幼稚園を訪れたのは。ああ、その幼稚園はもうありません」。

「六人の日本の紳士」とは、言うまでもなく岩倉使節団の教育担当理事官、田中不二磨一行である。イートンとクラウスが彼らを幼稚園に案内したという三年前、すなわち、森がデロングの要求を退けて少女たちを自分の保護下においた一八七二（明治5）年、ワシントンには幼稚園が二つあった。その一つは、同じくピーボディーの要請を受けてハンブルグから渡米した Emma Marwedel が一八七一年に設立した幼稚園で、中央官庁街に近いK街にあった。日本弁務使館のあるM街からもほど近い。ピーボディーは同園をワシントンにおけるモデル幼稚園と呼んでいる。一八七四年の教育局報告でも同園だけが特別に紹介されているから、イートンが教育視察の日本人たちを連れて行ったのは、ワシントンの幼稚園を代表するこの園であったとみて間違いない。

Marwedelは、教育は幼稚園で終わるのではなくそこから始まるとして、三歳半から十二歳までの幼児・児童を集めた学校を開設し、幼稚園はそこに付設されていた。全生徒数五十、教師数五であったから、幼稚園としては十人程度の規模だったろう。「六人の日本の紳士」は同所に特別な感想を抱かなかつたようである（田中一行の視察報告書『理事功程』合衆国の部には、幼稚園についての記述はない）が、現に満七歳から十四歳の少女たちを預かっている森には、大変興味深い教育施設だったはずである。しかし同園は事情があつたらしく市内で転居し、最終的にはクラウスが嘆いているようにワシントンを引き揚げてしまい、一八七六年にはロサンゼルスに移つてしまった。だが、西海岸の新天地で多くの優れた幼稚園教師を養成し、幼稚園運動に大きく貢献した。

ピーボディーのコメント

おもしろいことに、*Kindergarten Messenger*でクラウスの手紙を紹介したピーボディーは「その幼稚園はもうあ

りません」という部分に次のような脚注をつけている。

「もし森氏の気まぐれがなかったら、ミス・フーパーの幼稚園が放棄されることはなかったでしょうし、当時ワシントンにいた少女たちの教育に採用されていたことでしょう。そうすれば幼稚園がまるごと日本に移植されることになったでしょうに。けれどもミス・フーパーが彼の求めに応じてすべての準備を整えた途端に、話は打ち切られてしまったのです」

森への非難が記されたピーボディーのこの興味深い脚注を、どう解釈したらよいであろうか。一八七二年の時点で、「ミス・フーパー」が全米のどこかで幼稚園を開いていたという記録はない。彼女の名前は*Kindergarten Messenger*の一八七四年十二月号に掲載された幼稚園教師一覧に、やはりピーボディーによってドイツから招聘されたMrs. Kriegeの養成校の卒業生として現れるのが記録上の初出である。その次にMiss Hooper, Kindergarten in private house, Alexandria, Va.とある。教育局資料には翌一八七五年にワシントン市内にMiss Hooper's Kindergarten

が開設されたとあるから、彼女は最終的にはワシントンで幼稚園を開くという望みをかなえたのであろう。

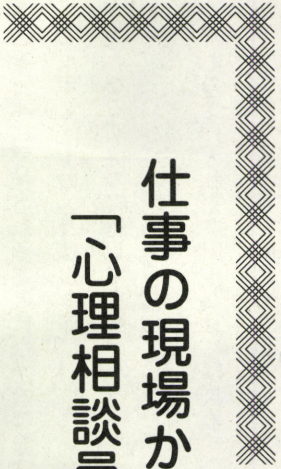
これらから考えることは、ピーボディーの言うようにそれが彼の「気まぐれ」であったかどうかはともかく、少なくとも森が梅子の教育の選択肢として幼稚園を考えていたことがあったというのである。おそらくピーボディーやイートンらに勧められて、そうした考えを抱いたのであろう。森から好感触を得たピーボディーが彼女一流の行動力で早速人選に動いたが、それが実現しなかった、ということなのではないか。「もし森氏の気まぐれがなかったら(略)当時ワシントンにいた少女たちの教育に採用されていたことでしょう。そうすれば幼稚園がまるごと日本に移植されることになったでしょうに」というピーボディーのいわば恨み節は、彼女が森に抱いていた大いなる期待の裏返しでもあったらう。

森も梅子の教育には迷いがあったと思われる。年長の少女たちの受け入れ先は同年七月には決めていたにもかかわらず、早くから梅子の受け入れを希望していたラン

マン夫人には、「なかなか決められなかったの」と九月まで返事が遅れたのはそのためであった。

森がこの時点ですれほど幼稚園について理解していたか、どのような幼稚園観を抱いていたかについては確たる資料はない。梅子は知的にも優れ、意志も強く、言葉のハンディがあっても小学校での学業に耐えうると判断されて、ランマン家に引き取られたのち、地元ジョージタウンの私立小学校に入学した。結果として、幼稚園のシステムは彼にとつて現下の必要物ではなくなってしまうのである。しかし、イートンとクラウスに案内されてMarwedelの学校を見学した田中不二磨が幼児の教育に特別な関心を抱かなかつたことに比べれば、自分の責任下に保護教育すべき幼年の少女を擁し、幼稚園運動の戦士であるピーボディーやクラウスらと直接かわりをもち、弁務使館近くにあるMarwedelの幼稚園を実際に訪問していたはずの森有礼が、幼児期の教育というものに一定の認識と関心をもっていたことは疑いえない。

(彰栄保育福祉専門学校・白百合女子大学非常勤講師)



仕事の現場から

「心理相談員って知っていますか？」

佐野恵子

私は、市町村の保健センターで行われている一歳半と、三〜三歳半の子どもを対象にした乳幼児健診の心理相談員をしています。子どもの発達の理解と子育て

支援を兼ね備えた役割を担っています。資格の有無はいまのところ問われていません。大学や大学院で心理や発達について学んだ人が就いていますが、大半が非常勤です。

ほとんどの母子は乳幼児健診を受けますが、心理相談を受ける人は少ないと思います。あまり知られていない仕事ですが、発達に困難を抱えそうな子どもに気づき、その子らしい育ちを支えるにはどうしたらいい

かを考える重要な役割を担っていると思います。では、どんな仕事なのかご案内しましょう。

乳幼児健診が開催される日には、その地域に住む対象年齢の子どもと母親（父親や祖父母の場合もあります）が、前もって配布された問診用紙に記入して保健センターに集まります。受付を済ませると、保健師が心身の成長を確認します。次に小児科医・歯科医の診察があり栄養相談や生活相談もあつて、最後に保健師が必要と判断した母子に心理相談を勧めます。

相談室は会場の中で一番静かな場所にあります。健診会場で泣き通しだった子どもと母親にとって、とり

あえずホッとできる場所になっています。しかし、どうしてここに来なければいけないのかと不安な気持ちを抱いて来る人もいます。中にはインターネットで得た情報で、発達障害かもしれないと不安になって来る人もいます。多くは言葉が遅い、かんしゃくが激しい、落ち着きがない、手をつなぎたがらない、吃音、爪かみ、人見知り、育児不安といった相談です。まれに虐待の疑いのある子どもと家族に会うこともあります。

心理相談員は子どもと遊び、母親の話を聞いて発達の課題の有無や程度を判断し母親の悩みを共有し、育児意欲を高めるような助言をします。必要に応じて電話や再来面接の約束をし経過をみます。フォロウ教室を紹介することもあります。

フォロウ教室は保健師・保育士・心理相談員のチームが一クール四〜六回の親子遊びを提供します。子どもは小集団の中で他者とかかわりながら遊びを体験します。母親同士の話し合いの場もあります。この過程で課題を確認し母子関係の改善や強化を図ります。上

記のフォロウを経て、発達の課題の大きな子どもは療育や医療機関を紹介します。そのほかの子どもたちも必要に応じて相談を継続します。このようにして出会ったたくさんの親子の中から、二つの印象に残っている事例をお話ししましょう。

Aは一歳半健診で、意味のある発語も指差しもなく、言葉の理解も対人関係も弱い子どもでした。言葉のかけ方や家での過ごし方などを助言し、再来面接を経て二歳ごろにフォロウ教室にお誘いしました。

そのころには簡単な言葉の理解が増え、なんとなくわかりあえるようになり、母親は喜んでいました。しかし、教室内では、手遊びや体操に参加することはなく、おもしろいものが目に入るとすぐにそちらに体が動いてしまう子どもでした。参加を始めて間もなく母親は妊娠がわかり、さらに切迫早産の可能性のために安静が必要と診断され、途中で教室は終了となりました。

そして、無事出産し、下の子を連れての移動が楽になつてきたころにAと面接しました。幼稚園の年少クラスを希望し、プレ保育に通い始めたところでした。久しぶりに会ったAはやはりマイペースな子でした。

家でもプレ保育でも落ち着きがなく、日々大変という訴えがありました。母子関係の悪化が生じてきており、入園後の集団生活も本人にとって大変だろうと判断し、療育相談室を紹介しました。すると母親は「この子は障害をもった子なんでしょうか……。やはりそうなんですね」と涙されました。私は保健センターでのフォローは限界があることと、療育相談室の役割を説明し、了解してもらいました。しかし、その時の母親の悲しみに満ちた重い表情が忘れられませんでした。

一年後、下の子の一歳半健診の会場で母親から声をかけられました。とても明るく元気な声で「おかげさまで、四月から介助員付きで幼稚園の年中クラスに入園することになりました」と報告してくれました。この一年間、幼稚園ではなく療育相談室でのグループを

利用し母子共にたくましくなっていました。このように、動揺しながらも障害を受容し前向きに生きていく母子に、私はたくさん出会ってきました。

Bがフォロークラスにやってきたのは二歳を過ぎたころでした。言葉理解に大きな遅れはないものの、マイペースでつかみどころのない子どもでした。母親からは、ご近所とのトラブルについての話が多くて、母親との間でBの理解が深まりませんでした。

その後、三歳児健診で発達の再確認をすることになりました。当日、Bはおもちゃ遊びに集中していたので、私は母親と話をすることにしました。少しすると、Bは同じフロアで遊んでいたCにおもちゃを取られてしまったようです。私はその状況を確認しないまま同じおもちゃを見つけてBに渡しました。Bは無言で受け取って同じように遊び続けました。その時、母親が「あの子は怒っています」と独り言のように言いました。すると、間もなくCがBの邪魔をしそうになっ

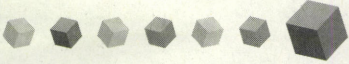
たので、私はBに「こつちでも遊べるよ」とCとは別方向の遊びの場を示しました。Bはその方向に移りながら遊びを続けました。トラブルにもならず平穩に時間が過ぎ、私はようやくBとかかわりがもてたとさえ思っていました。すると、再度母親が「あの子は怒っています」と静かな口調で言いました。私が「そのように見えませんが……」と言った途端、母親はCの所に行行って「だめでしょ」としかり、「こんな不公平な人は相談できない」と言って帰ろうとしました。私はその時、Bが落ち着いていたので終了にしても大丈夫だと思い「相談はおしまいにしましょうか」ととっさに言ってしまうました。すると、母親は「相談したいことがあるから来ているのに、別の人に代わってもらいます」と言って帰ってしまいました。

その後が大変でした。母親は苦情の電話をセンターにかけてきて、私が以前から話を聞いてくれない人であると訴えました。私は相談終了を告げてしまったこととは反省したものの、それ以外の非はなかったと思っ

ていました。しかし後になって、あの場面で怒っていたのはBではなく母親自身だったかもしれないことに気づいたのでした。それは、Cに対して注意しようとしてない私に対する不満であったのかもしれないし、またほかの理由があったのかもしれないが推測はしてみるものの本当のことはわかりません。ただ、母親自身の表現の仕方やBとの関係のもち方に早くから気づいていれば、母親に嫌な思いをさせず、もう少し母親に添った対応ができたのかもしれないと反省させられました。わからないことがありながら母子に寄り添うことの難しさを教えられました。

以上の二つの例を通して私の心理相談員としての仕事の一端を紹介しました。今後も発達や地域支援に関する最新の情報を得ながら、幼い子どもと母親や家族から多くを学び、より良い支援ができますように努力して参りたいと思っています。

(心理相談員)



保育の現場から

未就園児クラスの保育で思うこと

河野道子

クラスのあらまし

K大学併設幼稚園のたんぽぽクラスは、未就園児（二歳、三歳）とその保護者のためのクラスです。参加する保護者は主にお母さんですが、お仕事のため、お祖母さんの場合もあります。

ひとクラス16組の親子が週一回のペースで、年間通います。保育スタッフは幼稚園職員（教諭）が3名前後、学生ボランティアがクラスに5名前後、通年

で入ります。活動時間は一時間半。お弁当持参でもう少し時間が長い回も各学期に二度ほどあります。四クラス編成で、現在64組の親子が在籍しています。

一回の活動を大まかに区切ると、「自由に遊ぶ」、「みんなが集まって歌遊びやダンスをする」、「先生と向き合い紙芝居や絵本を見る」という流れです。自由に遊ぶ時間は、お部屋でのコーナー遊びがメインですが、子どもがクラスに慣れてきた時期から、散歩、戸外での感触遊び、小遠足、秋の味覚狩りごっこ、体育館で

の運動遊び、お料理など、いつもの遊びにプラスして、特別な遊びも盛り込んでいきます。

遊びが子どもをひろく

たんぽぽクラスは、子どもが主役の場です。初めて足を踏み入れる新しい環境の中で、安定した気持ちでいる、興味をもったものに自分から動いていく、自分で好きなことを選び、満足するまで十分に遊ぶ、どの子どももそういう姿になるように、大人が必要な援助をしていきます。この年齢の子どもは、新しい環境に慣れるまで時間がかかります。リラクセスした状態になって初めて、自分で動き出せるようになります。ですから、お母さんには、子どもと一緒に過ごしてもらい、子どもの気持ちに添って、たくさん遊んでもらいます。

こうして親子が遊んでいるところに、保育スタッフがかかわっていきます。「こんなものもあるよ」と、遊

びがよりおもしろくなるような提案をしてみます。子どもがしていることをまねたり、共感を示したりすることで、「あなたが好きですよ」というアピールをしていきます。子どもは最初、お母さんのかけに隠れたり、こちらの働きかけに気づかないふりをしたりして戸惑いを見せます。けれどもだんだん、スタッフがおもしろいことをして遊ぶ人だ、ということがわかってきて注目し始めます。スタッフの働きかけを受け取り、少しずつ何かを返してくれるようになります。それでも、まだまだ自分の好きなことで遊び込んでいる段階です。ひと通り遊びきって満足した子どもは、周りに目を向け始めます。そういう子どもは、一学期中にスタッフの後を追って、同じことをしてみようと始めます。二学期になると、スタッフの周りに子どもが集まり始めます。スタッフはお母さんを巻き込み、ほかのスタッフと連携を取りながら、簡単なごっこ遊びを展開します。ごっこの発端は、目の前の子ども遊びです。

それを関連づけて遊びの形をつくっていきます。子どもが共通のイメージをもちやすいように、シンプルなパターンを繰り返したり、わかりやすいように擬音を用いたりするなど、工夫しながら、子どもたちに遊び方を見せていきます。アイテムがイメージをつなぐ重要な役割を果たします。子どもたちは体験したごっこ遊びの中に、気に入ったものができてきます。それを、お母さんやスタッフを誘って、何度も何度もやってみるようになります。

やがて、自分が大人相手に進めている遊びに、ほかの子どもが興味をもつて入ってくるようになります。最初は入ってこられることが嫌な子どももいます。けれども、大人が間を取りもっているうちに、一緒に遊ぶと楽しいということに気づくようになります。これが、二学期後半から三学期です。この時期になると、同じ遊びが好きな子ども同士が連れだって行動し、自分たちでごっこ遊びを進める様子も見られるようにな

ります。このように、遊びを通して、子どもたちが他者とつながり、関係をつくっていく過程を確認することができます。

「うちの子はお友達と全然遊ばないんです」スタート時点で、そう訴えてくるお母さんが、毎年少なからずいます。「どれどれ子どもは？」と見てみると、大概自分の好きなことに集中してよく遊んでいます。「いまはこうして満足するまでじっくり遊ぶことが大事なんですよ」と話し、これから先の見通しを伝えるのですが、お母さんは半信半疑です。「せっかくここに来ているのに、自分とばかり一緒にいる」と不満そうです。大丈夫、と励ましていくよりほかありません。

ところがそういうお母さんも、二学期、三学期と子どもが変わっていく様子を目の当たりにして、私たちの話が気休めではなく、本当のことだったのだとようやく理解してくれます。「自分が焦ってお友達のように誘っても、結局好きなことはかりやっていた。イライ

ラせずには待てば良かった」と落ち着いて考えられるようになりま。子どもへの接し方に、余裕も出てきます。たんぼほクラスでは、集団の中にいるわが子を、近くでよく見ることができ、変化していく様子を感じ取ることができます。話を聞くだけではわからなかったことが、実際の場面を見て、すくと納得できたりします。そこがたんぼほクラスの良さだと思ひます。

子どもの世界、大人の援助

子どもはやってみたいと思つたらじつとしていられませ。おもしろそうなものが目に入れば手を伸ばします。やりたいと思つたら邪魔になるものを押しつけても進んでいきます。それはごく自然な姿です。一学期には、遊具の取り合ひ、場所の取り合ひが頻発します。大泣きする子どもも出てきます。そうした中、起こつたトラブルへのお母さんの対処の仕方はなぜか画一的です。問答無用にわが子を止め、ルールを教え

ようと、無理にでも謝らせようとします。子どもはしかられ、よくわからないまま何とかその場をしのご、自由になつたら別の場所ですぐにまた小競り合ひを始めたります。お母さんは、周りに申し訳ないという気持ちで、わが子に対してどんどん厳しくなつていきます。こういう光景を毎年目にします。いつもしかられている子どもは、大人に対する信頼感が薄いという共通点があります。もめている場所に、話をしようとして近寄つただけで逃げたり、興奮してパニックのようになつてしまつたりします。本来問題ではないことがこじれて、問題のようになってしまつて残るのが残



念です。

お母さんたちの多くは、子どもが小さいうちから、外の世界とかかわりをもたせようと、積極的に公園や育児サークルに連れ出しています。そういう場合は、子どもがほかの子どもと出会う場であると同時に、お母さんにとつても仲間づくりの場になっています。お母さんには、周りと協調し、うまくやっていきたいという思いがあります。子どもにもそれを求めます。ですから、子どもの間でトラブルが起こった時には、とにかく「けんかしない、仲良く」と子どもをしっかりとまです。トラブルに至った子どもの気持ちに目を向けることなく「返しなさい」「貸してあげなさい」「順番でやりなさい」と、ルールでその場を仕切り、終わらせてしまいます。このやり方では子どもは気持ち収まらないでしょう。また、子どもに学びがあるかという点、あまり期待はできないと思います。

「こういうことをしてはいけない」というルールを先

に教える、ということは方法論としてあるでしょう。

けれども、二、三歳児にはそぐわないものです。理解する力が伴っていません。子どもの気持ちに添って話していくほうが遠回りのようで、実は近道です。ただ、そのためには、お母さんは子どものそばにいて、タイミング良く声をかけていくことが大切になってきます。

たとえば、滑り台で自分が滑りたくて、他児を押しつけようとしている場合には、体を抱きながら「早くやりたいね」と声をかけてあげる、そうすると、子どもはハツとして動きを止めます。「この子が滑ったら行こうね」と前にいる他児に注意を向けさせる、そうすると、やはり子どもはハツとして前にいる子どもの動きに注目します。単に周りが見えていないだけで、少し手伝ってあげれば、無理矢理割り込んだりせず待つことができるのです。

他児が使っていた遊具を取ってしまった子どもにも「やってみたいね。でもそれはお友達が使っているみ

たいだよ。同じものがあるから取りにいこう」そういう提案をしてみると、子どもはついてきてくれたりします。

いつも使いたいものを使えずにくすぶっている子どものお母さんにしても「気が弱くてダメなんです」と言うばかりで、わが子のために何かしてあげてはいません。「いま、お友達が使っているでしょ」と、あきらめさせています。「私もやりたいんだけど」と気持ちを代弁し、それに続く交渉の過程を一緒に経験してあげること、子どもは気持ちの伝え方や、思いをかなえるための方法を知っていきけるのに、残念です。

私たちが実際の場面で子どもの気持ちに添った対応をして見せ「なぜ、そうしたか」という理由を伝えることで、お母さんも徐々に変わります。人とかかわることは、実はそんなに難しいことはありません。大人が、状況に応じた行動のモデルを見せることで、子どもが気負うことなく学んでいけたらよいと思います。

たんぽぽクラスは、そのことにお母さんが気づいていける場でもあると思います。

親子にかかわるといふこと

「一人でも多くの子どもに幸せな幼児期を」というのが、私の保育の動機です。実現するために、以前は、子どもの遊びの充実を直接に援助していました。いまは、その役割をお母さんに委ね、一歩退いてみようと思うようになりました。「子どもを私はこんなふうに見ている。子どもはこんなにおもしろい」ということを、実際の場面で、お母さんにたくさん伝えていきたいと思えます。お母さんが、いままでとは違った視点で子どもをとらえ、こう働きかけてみたらどうだろうと心を躍らせる、そんなクラスにしていきたいと思えます。そういうことも、子どもの幸せにつながっていくだろうと考えるようになりました。

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(4)〉

日常性から保育カリキュラムを考える(2)

いずみナーサリーにおける

保育カリキュラム

私市和子

保育課程の編成

保育所保育指針が改定されて、これまで「保育計画」としていた保育の全体計画が「保育課程」と改められました。このため、お茶の水女子大学（以下、お茶大）いずみナーサリー（以下、ナーサリー）では、保育所の役割を明確にして職員・幼保プロジェクトの先生方とも話し合いを重ねて、大学という地域性を活かした保育課程の編成を試みました。

ナーサリーの「利用日数選択型保育」形態の中では、

保護者（主に女性研究者・職員・学生）の研究生活の進め方や働き方に応じて月ごとに決められた曜日に子どもたちは登園しますので、日によって人数も顔ぶれも違ってきます。後期になると院生の保護者の希望が多く、〇歳児が次々と入所して狭い室内で過ごすのは困難になるので、発達や育ちに応じて〇歳から一歳へ、一歳から二歳へと数人がクラスを移行します。保育カリキュラムの中では年齢の枠はありますが、ゆるやかに重なり合う保育、柔軟な保育を行うことが必要になり、特に「少日数利用型保育」（週1〜2日登園）の子どもたちには、安定

した生活リズム・人・ものとのかわりが次の登園日に
つながるようについていねいに個別配慮しています。

また、保護者のニーズに応じた「一時預かり保育」で
は、子どもが安心できるものや場に出合えるようにと考
えています。ナーサリーの子どもたちは、不安になって
泣く子を少し心配しながらもつられたりせず、また、自
分より大きな子がくると大胆な遊びやテンポの良い会話
を楽しみます。そこには、同じ場に集う共通の意味と共
有するもののおもしろさ、いつもと違う人との出会いが
あります。

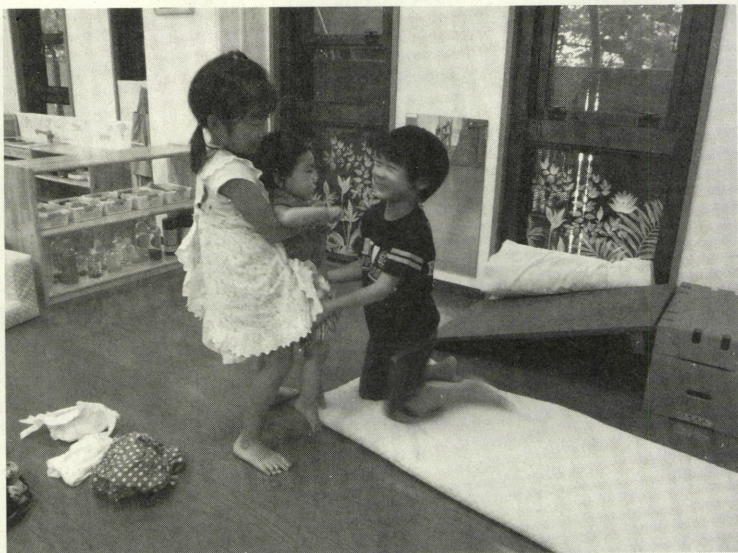
附属幼稚園とのかかわり

お茶大附属幼稚園（以下、附属幼稚園）への入園は接
続していません。しかし同じ場で遊びかわることも多
く、大学の附属園として、いずみナーサリーと幼稚園保
育（教育）課程の整合性・融合性を視野に入れる必要があ
ると考え、附属幼稚園が考案した『幼稚園学^註びの概要』
という枠組みを参考にして保育課程案を作成しました。

春、幼稚園に新しく入園した子どもたちが園庭のお山
の上でナーサリーの建物に気づき、入り口をのぞく姿が
見られます（P.61マップ参照）。室内からその姿を見る
とヘンゼルとグレーテルがお菓子の家を見つけた場面と
重なり楽しくなります。そこで私が玄関から「こんにち
は」と出て行くと今度は魔法使いのお婆さんに出会った
ように驚いて去っていくのです。その後、ナーサリーの
子どもたちがお山で遊ぶようになるころ、ナーサリーと
いう家の存在、小さな子どもたちの存在に気づきます。

春の「じゃがいもパーティー」では、幼稚園の子ども
たちに不安そうに手を引かれお山を降り、お互いに緊張
感がありました。日々のお山の出会いはその距離を近
づけるようです。

ある日、幼稚園から二人の子が野菜を収穫、調理して
「食べてください」と持って来てくれました。ちょうど
散歩から帰ってきたKちゃんが着替えるところだったの
で、「着替えをお手伝いしてくれる？」と聞くと「いいよ、
でも私、一人っ子だからやったことないの」と言い、



▲二人で協力して0歳児にズボンをはかせている

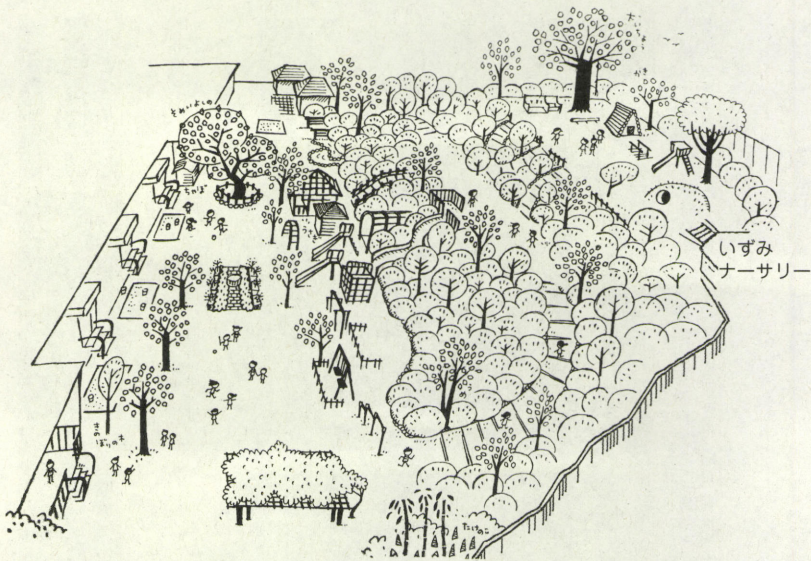
もう一人の子が「大丈夫だよ、僕が手伝うから二人でやろう」と小さな子を抱き上げ、協力してズボンをはかせてくれました。Kちゃんは、ちょっと窮屈そうでしたが泣かずに応じてくれました。そしてKちゃんの手を洗い、ほかの子どもたちも席に着くと大きな器に入った炒めたピーマンを一人ひとりの皿に分けます。ピーマンの量と並んでいる椅子を比べ、「このくらい入れても大丈夫」とその場にはない子の分も考えて分けているようでした。一歳児は、その姿をじっと見つめ、家では食べないと思われる緑のピーマンを口に入れてもらい、パクパク食べていました。ナーサリーの子どもたちに向けられた二人の思いを一歳児がしっかりと受けとめているようでした。幼稚園の二人は何かをやり遂げたような表情で帰って来ました。

秋の「しいのみパーティー」では、安心して幼稚園の子どもたちに身を委ねてお山を降りてくる子どもたちにも、「よさこいソーラン節」を踊ったり、しいのみの皮をむいたり、カエルを見せたりなどの歓迎をしてくれました。

ここでも、大切にされていることを心地よく感じている
一・二歳児がいます。その後、ナーサリーでは、ソーラ
ン節ごっこが始まり、どんぐりを拾うと皮をむこうとす
る姿が見られました。

幼稚園の子どもたちがお山を軽やかに登ったり降りた
りする姿を見て「登りたい」という思いになるのでしょ
う、ナーサリーの子どもたちはお山を見上げて挑戦を始
めます。あのように大きくなりたいとあこがれを抱く二
歳児です。保育カリキュラムのゆるやかなつながりの必
要性を、子どもたちが教えてくれているようです。

附属幼稚園の『幼稚園学びの概要』では、三歳児のス
テージに「出会い・安定」とあります。だとすると〇〇
二歳のナーサリーの子どもたちは、すべてが「出会い」
ではないでしょうか。母親と離れ保育士と信頼関係を築
きながら、学生・友達・ものと出会い、そこから少しず
つ自分の世界を自分の力で広げていく子どもたち。必要
なのは、その時に温かく見守ってくれる安心できる大人
の存在であり「出会いと安心」なのかもしれません。



▲お茶の水女子大学附属幼稚園 園庭マップ

学生とのかかわり

保育カリキュラムの中で学生は欠かせない存在です。インターンシップ、おやつ作り、保育ボランティアとさまざまな形で学生がナーサリーにかかわっています。

二十一年度は楽器演奏ボランティアを保育に巻き込みましたが、学生と子どもたちの両者が一体となった温かい時間が流れました。子どもたちにとってはフルート・クラリネット・トロンボーンなどの本物の音に触れる機会になり、学生にとっても授業では得られない学びがありました。

次の日、子どもたちは「ブープーのお姉さん来る？」と聞き、「ブープー」と歌うようにリズムをつけるので、色画用紙を丸めて細い棒を渡すと「ブープーのお姉さんごっこ」が始まりました。

保育士・学生・保護者、子どもにかかわるすべての人が共に協力して育ちあう場になることが、いずみナーサリーの役割ではないかと考えます。



▲室内に面した人工芝で演奏する楽器ボランティア学生



▲演奏会の後に始まった「プープーのお姉さんごっこ」

幼保プロジェクトと共に研究を進めた三歳未満児の表現活動、対話的保育を日々の保育実践として積み重ねること、そして、月（クラス、個別）・週・日の記録から保育を振り返り省察を深め「利用日数選択型保育」における保育カリキュラムの検証をしていくことが、ナーサリーの保育の質を高めることになるのだと考えています。

（お茶の水女子大学いずみナーサリー）

注

1 参考までに、お茶の水女子大学いずみナーサリーの平成21年度保育課程の一部を掲載する。

いずみナーサリーの役割

- ◆ 乳児の発達の視点に立った質の高い保育をめざす。
- ◆ 女性研究者支援と教職員の福利厚生のある場である。
- ◆ 乳児の発達と保育に関する研究をおこなう。
- ◆ 学生の実習と多様な研究の場を提供する。

2

『幼稚園学びの概要』とは、お茶の水女子大学附属幼稚園の教育課程である。

編集後記

8月にカーディガン、新しい季語というわけではないが、都市に暮らす、特に女性にとって、真夏の外出時、薄手の羽織りものを持ち歩くことが常識になってきた。炎天下、ジーンと日差しの照りつける街中を歩いても、どこかビルに飛び込めば、冷房のきいた空間で一息つける。その時に羽織るカーディガンが必携というわけだ。

今号で、コピソン先生が追想された倉橋惣三の言葉自体は、春3月の卒園児たちへ贈られたものだった。しかし、この8月、日本が敗戦を迎えたのと同じ酷暑の中で、ジーンと目をそらさず、できる限りの想像力を働かせ、60数年間というギャップを埋めながら読んでみたい。戦争から子どもを守るとはどういうことなのか。涼しい冷房の中に逃げ込まずに考え続けたい。(H)

幼児の教育 第109巻 第8号

平成22年 8月1日発行
編集兼発行人 浜口順子
編集担当 金子めぐみ・田中恭子
発行所 日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発売所 株式会社フレーベル館
☎03-5395-6604 (編集)
振替 00190-2-19640
印刷所 図書印刷株式会社
定価 550円 (本体524円)
©日本幼稚園協会 2010 Printed in Japan

編集協力 フレーベル館
表紙絵 後宮ひろみ
扉題字 津守 眞
本文カット 田崎トシ子
編集スタッフ 高橋陽子
佐藤寛子

ご購入のお問い合わせは、
フレーベル館までお願いします。
☎03-5395-6613 (営業)

●次号予告

〈特集〉いま、倉橋と出会う 8

「いきいきしさ」

首藤美香子・安達敬子・川辺尚子・佐治由美子

・発達心理学者の子育て奮戦記 (12) 長田瑞恵

☆次号の内容は、都合により変更される場合があります。

『幼児の教育』バックナンバーがネットでご覧になれます！

お茶の水女子大学附属図書館のHP上、教育・研究成果コレクション"TeaPot"

<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/3705/bulletin/>

へ、アクセスしてください。

明治34年発行の創刊号から、現在、平成19年発行の第106巻まで公開されて

います。ご意見・ご感想などは、[youjimap@yahoo.co.jp](mailto:youjimap@yahoocoo.jp)までお寄せください。

10年後も「選ばれる園」であるために

少子化時代の
保育をリードする
視点が満載！

次世代の保育のかたち

—幼稚園・保育所の可能性と限界—

吉田正幸／編著

認定こども園のチャレンジから 保育の未来を探る！

子ども環境が大きく変貌する現代において
幼稚園・保育所に求められる機能が
変わりつつあります。

10年後にも選ばれる園で
あり続けるために

今、すべきことは何でしょうか？

認定こども園の5つのケーススタディと
イギリスやドイツなど

海外の先進的な事例より、

近未来の保育のかたちを浮き彫りにします！

21×15cm 264ページ 定価 1,890円(税込)

次世代の 保育のかたち

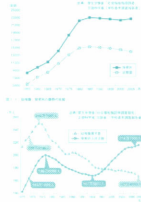
—幼稚園・保育所の可能性と限界—

吉田正幸 編著

認定こども園のチャレンジから
保育の未来を探る

10746

保育所志向・幼稚園離れは
なぜ起こっているのでしょうか？



● 保育所志向、幼稚園離れの原因
保育所志向の増加は、保育料の低減、保育時間の延長、認定こども園の増加による保育所の役割の変化などが要因と見られる。幼稚園離れは、幼稚園の保育料の高さ、幼稚園の保育時間の短さ、認定こども園の増加による幼稚園の役割の変化などが要因と見られる。

▲現代の保育事情、幼保の現状と課題を細やかに解説！

キンダーブックの
フレーベル館

Contents

はじめに

第1章 幼稚園・保育所に起きている変化

第2章 認定こども園の誕生

第3章 ケーススタディから探る保育のかたち

第4章 ヨーロッパの保育事情に学ぶ

第5章 幼稚園・保育所の未来の可能性

おわりに

参考文献

好評発売中

論文執筆・発表など、保育研究に必要なルールが1冊に！
保育に携わるすべての保育者・研究者必携！

保育学研究倫理ガイドブック

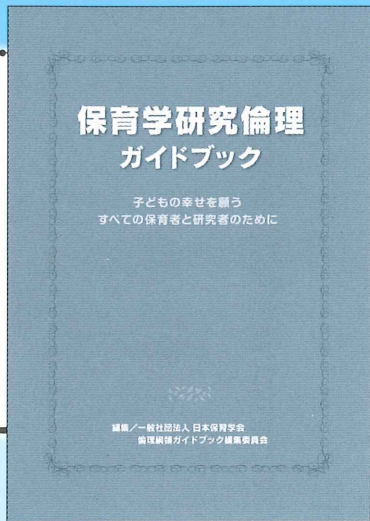
—子どもの幸せを願うすべての保育者と研究者のために—

一般社団法人日本保育学会 倫理綱領ガイドブック編集委員会/編

保育学研究の指針となる倫理ガイドブックが刊行されました。保育学研究の心得を具体的な事例や用語解説などを用いて、わかりやすく、ていねいに解説します。

保育所や幼稚園など、保育現場の実践者や園にさまざまなかたちでかかわり、研究をされている方々にお薦めします。

21×15 cm 96ページ 定価1,000円(税込)



10917

● 内容 ●

条文を解説&キーワードで読み説きます

第1部 保育学研究における倫理

1. 保育学研究における倫理とは何か
2. 「日本保育学会倫理綱領」条文解説

気になるポイントを

1項目 450文字程度でコンパクトに解説

第2部 研究成果の発表と倫理

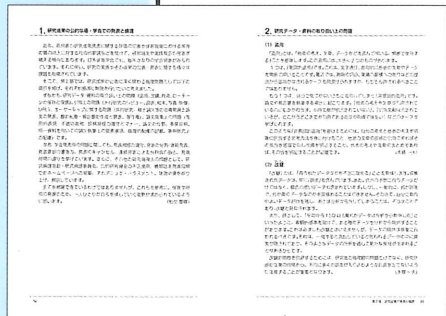
1. 研究成果の公的な場・学会での発表と倫理
2. 研究データ・資料の取り扱い上の問題
3. 引用上の問題
4. オープンシップに関する問題
5. 論文執筆上の問題
6. 学会発表時の問題
7. その他の研究倫理上の問題

ケースごとに、2つの具体例を紹介

第3部 保育学研究の実施と倫理の事例

1. 保育実践研究の実施における倫理の枠組み
2. 倫理の事例

第4部 倫理の教育



キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

定価 五五〇円(本体五一四円)☆